福岡市博多区

席田遺跡群（V）

丸尾古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第114集

1985

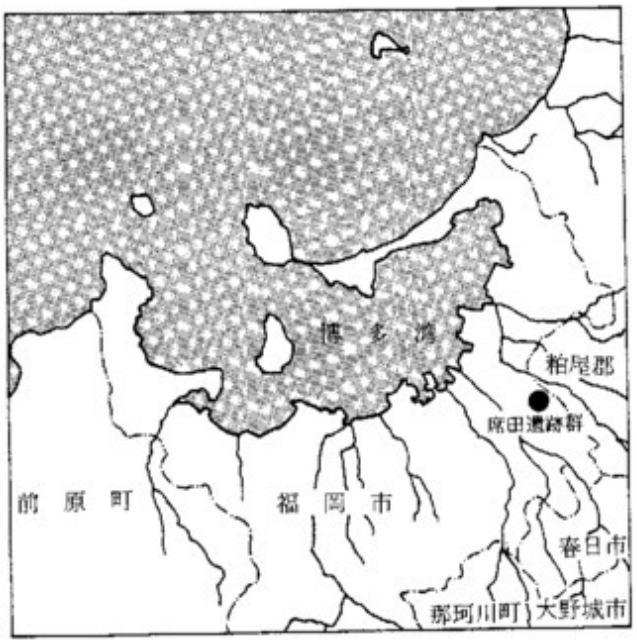
福岡市教育委員会

福岡市博多区

席田遺跡群（V）

丸尾古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第114集



1985

福岡市教育委員会

丸尾古墳

丸尾古墳出土の玉類

序　　文

昭和47年８月、米軍板付基地弾薬庫跡地約 75 ha が福岡市に無償貸与されて以来、福岡市都市計画局は東平尾総合運動公園の整備計画を進めております。都市計画局の埋蔵文化財調査依頼に基づき福岡市教育委員会では、昭和49年度に分布調査を行ない、昭和50年度から毎年発掘調査を実施し、現在に至っています。

本書は、昭和57年に調査を実施した丸尾古墳について報告するものです。報告書に見られるように２基の古墳を発掘し多くの成果をあげることができました。

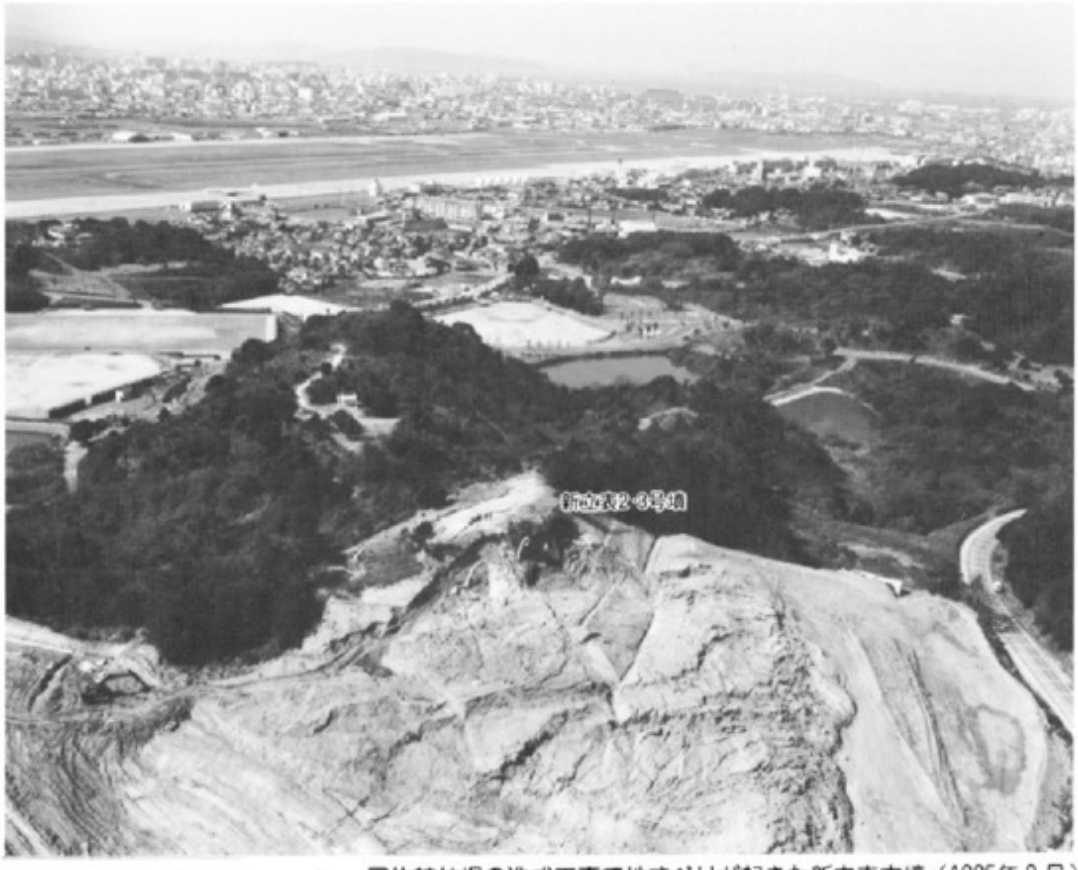
発掘調査から資料整理に至るまでの多くの人々の御協力に対し、心から感謝の意を表します。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となることを願うとともに研究資料としても活用いただければ幸いです。

昭和60年３月 31 日

福岡市教育委員会

教育長　　西　津　茂　美



国体競技場の造成工事で地すべりが起きた新立表古墳（1985年２月）

例　言

1．本書は，東平尾総合運動公園内における草スキー場建設工事に先行して発掘調査した丸尾古墳の報告書です。

2．丸尾古墳の発掘調査は，1982年12月より翌年１月まで実施したもので，東平尾総合運動公園（席田遺跡群）内では第８次の発掘調査に当ります。

3．丸尾古墳は，現在，草スキー場の中に保存されています。

4．本書に掲載した遺構，遺物の実測図，写真は，各々縮尺を統一しています。遺物には次の頭文字を付し，通し番号としました。

　Su（須恵器）　H（土師式土器）　K（鉄器）　B（玉類）

5．本書の執筆，編集は，大庭と力武が協議，分担して行ないました。報告書作成には，村田喜代美さんのご協力をえました。

6．丸尾古墳の出土遺物，実測図は，福岡市埋蔵文化財センターに保管収蔵されています。

丸尾古墳の遠景（展望台上空から）

本文目次

第1章　はじめに……1

1．発掘調査に至るまで……1

2．発掘調査の組織と構成……1

第2章　発掘調査の記録……6

1．発掘調査の概要と経過……6

2．遺構と遺物……9

① 丸尾1号墳……9

1 墳　丘……9

2 石　室……12

3 遺　物……16

土　器……17

鉄　器……18

玉　類……20

② 丸尾2号墳……23

1 墳　丘……24

2 周　溝……24

3 石　室……29

石室の掘り方……29

玄　室……31

羨　道……33

4 遺　物……35

土　器……35

鉄　器……42

玉　類……49

第3章　おわりに……50

挿図・表目次

1 草スキー場内に整備された丸尾古墳……1
2 席田遺跡群と周辺の古墳（縮尺1/50,000）……2
3 席田遺跡群周辺の航空写真……3
4 席田遺跡群より三郡・若杉山を望む……3
5 席田遺跡群の地形図（縮尺1/5,000）……4
6 席田遺跡群遠景（福岡空港上空から）……4
7 貝花尾１号墳……5
8 貝花尾２号墳……5
9 新立表２号墳……5
10 新立表３号墳……5
11 貝花尾、新立表古墳の遠景……5
12 発掘作業開始……6
13 丸尾１号墳の発掘作業……6
14 丸尾２号墳の発掘作業……6
15 席田遺跡群古墳分布図……7
16 丸尾古墳遠景（大谷遺跡から）……7
17 丸尾古墳トレンチ配置図（縮尺1/400 ）……8
18 丸尾古墳全景……8
19 １号墳の発掘作業……9
20 １号墳の実測……9
21 １号墳の埋戻し……9
22 １号墳の地形実測図（縮尺1/100）……10
23 １号墳の墳丘断面図（縮尺1/30）……11
24 １号墳と墳丘断面……11
25 １号墳墳丘断面の実測作業……11
26 １号墳の石室……12
27 １号墳の石室実測図（縮尺1/30）……13
28 １号墳の石室……14
29 １号墳の石室……14
30 １号墳石室の奥壁……15

31　1号墳石室の掘り方……15
32　1号墳石室の遺物出土位置(縮尺1/20)……16
33　1号墳石室の遺物出土状況……16
34　1号墳出土の土器実測図（縮尺1/3)……17
35　1号墳出土の土器（縮尺1/3)……17
36　1号墳の土器出土状況……17
37　1号墳の鉄器出土状況（直刀）……18
38　1号墳の鉄器出土状況（鉄鏃）……18
39　1号墳出土の鉄器実測図（縮尺1/4)……18
40　1号墳出土の鉄器（縮尺1/4)……18
41　1号墳出土の鉄器実測図（縮尺1/2)……19
42　1号墳出土の鉄器（縮尺1/2)……19
43　1号墳出土の玉類実測図と計測表（縮尺1/1)……20
44　1号墳出土の玉類実測図と計測表（縮尺1/1)……21
45　1号墳出土の玉類実測図と計測表（縮尺1/1)……22
46　**2号墳**……23
47　2号墳……23
48　2号墳周溝の発掘作業……24
49　2号墳の地形実測図（縮尺1/100）……折り込み　24～25
50　2号墳周溝の断面（4号トレンチ）……25
51　2号墳周溝の断面（9号トレンチ）……25
52　2号墳墳丘の断面実測図（1号トレンチ）……26
53　2号墳墳丘の断面実測図（3号トレンチ）……26
54　2号墳の墳丘土層（3号トレンチ）……27
55　2号墳の墳丘土層（1号トレンチ）……27
56　2号墳墳丘の断面実測図（4号トレンチ）……28
57　2号墳墳丘の断面実測図（2号トレンチ）……28
58　2号墳石室の掘り方土層……29
59　2号墳玄室の掘り方の実測図（縮尺1/40）……29
60　2号墳の石室全景……30
61　2号墳の石室実測図（縮尺1/40）……折り込み　30～31
62　2号墳玄室の裏込め石……31
63　2号墳の玄室……31

64 2号墳玄室の奥壁……32
65 2号墳玄室の奥壁実測図（縮尺1/40）……32
66 2号墳の玄門……32
67 2号墳玄門の実測図（縮尺1/40）……32
68 2号墳石室の羨道実測図（縮尺1/40）……33
69 2号墳石室の羨道……34
70 2号墳石室の羨道……34
71 6号トレンチの土器出土状況……35
72 2号墳石室の遺物出土位置……35
73 2号墳玄室の遺物出土状況……35
74 2号墳出土の土器実測図（縮尺1/3）……36
75 2号墳出土の土器（縮尺1/2、1/3）……36
76 2号墳出土の土器実測図（縮尺1/3）……37
77 2号墳出土の土器（縮尺1/2）……37
78 2号墳出土の土器実測図（縮尺1/3）……38
79 2号墳出土の土器実測図（縮尺1/3）……39
80 2号墳出土の土器（縮尺1/3）……39
81 2号墳出土の土器実測図（縮尺1/3）……40
82 2号墳出土の土器（縮尺1/3）……40
83 2号墳出土の土器実測図（縮尺1/3）……40
84 2号墳出土の土器実測図（縮尺1/4）……41
85 2号墳出土の土器(縮尺1/4)……42
86 2号墳の鉄器出土状況（直刀）……43
87 2号墳の鉄器出土状況（鞭・直刀）……43
88 2号墳出土の鉄器実測図（縮尺1/2，1/4）……44
89 2号墳出土の鉄器……45
90 2号墳出土の鉄器実測図（縮尺1/2）……46
91 2号墳出土の鉄器実測図（縮尺1/2）……46
92 2号墳出土の鉄器（縮尺1/2）……47
93 2号墳出土の鉄器（縮尺1/2）……47
94 2号墳出土の鉄器実測図（縮尺1/2）……48
95 2号墳出土の鉄器（縮尺1/2）……48
96 2号墳出土の鉄器実測図（縮尺1/2）……49
97 2号墳出土の鉄器（縮尺1/2）……49
98 2号墳出土の玉類実測図（縮尺1/1）……49

第1章　はじめに

1．発掘調査に至るまで

米軍の弾薬庫施設のあった席田の山間部は、返還後、総合運動公園として各施設が整えられ一般に公開されています。さらに1990年の国民体育大会の主会場に決定するに及び、新たな競技施設などの建設工事が立案され、現在急ピッチで進められています。公園建設課は、1982年度の事業として、久保園遺跡（福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集）のあった第1野球場の南隣接地に第2野球場を建設することを計画しました。文化課は、この計画を受けて1982年3月の試掘より着手し、そのまま本調査に入りました。第2野球場の建設地は、小字名から赤穂ノ浦遺跡と名づけましたが発掘開始早々に銅鐸鋳型片が出土し、すでに表土剝ぎを済ました範囲だけを調査するにとどめ、遺跡保存について公園建設課と協議しました。公園建設課は、遺跡の重要性を理解して計画を完全に変更し、赤穂ノ浦遺跡は現状保存されることに決定しましたがこの振り代えとして小字丸尾に草スキー場の建設が計画されました。

1 草スキー場内に整備された丸尾古墳

2．発掘調査の組織と構成

調査委託　福岡市都市計画局

調査主体　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係

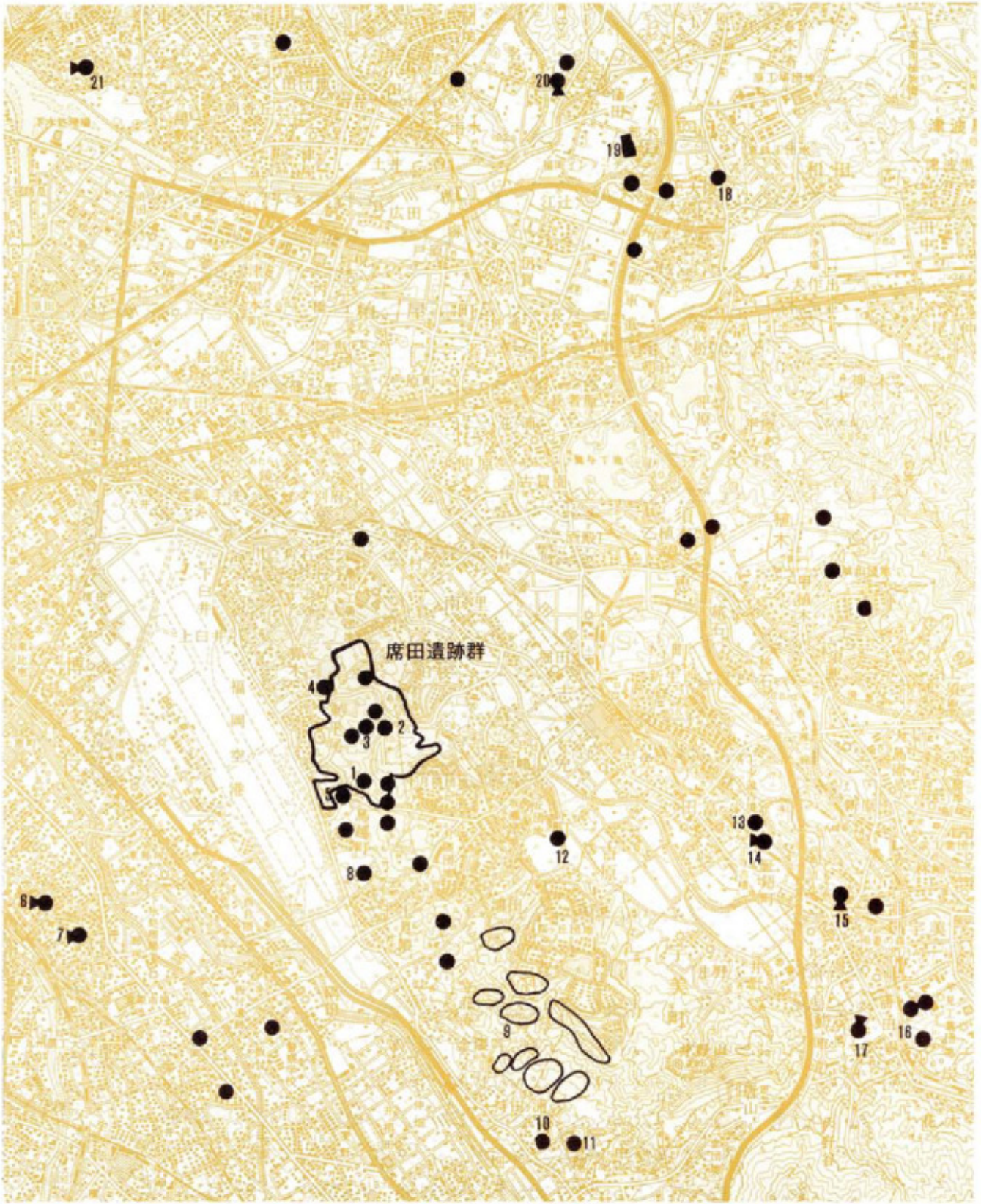
柳田純孝　古藤国生　松延好文（事務担当）

力武卓治　大庭康時（発掘調査担当）

調査作業員　関加代子　山内タツ子　関政子　江越初代　黒木静子　沖浩人　加納雄三　大穂清　浅山徹　稲原進　安部雅彦

整理作業員　花畑照子　溝口博子　武原邦子　安武裕子　村田喜代美　松田美富

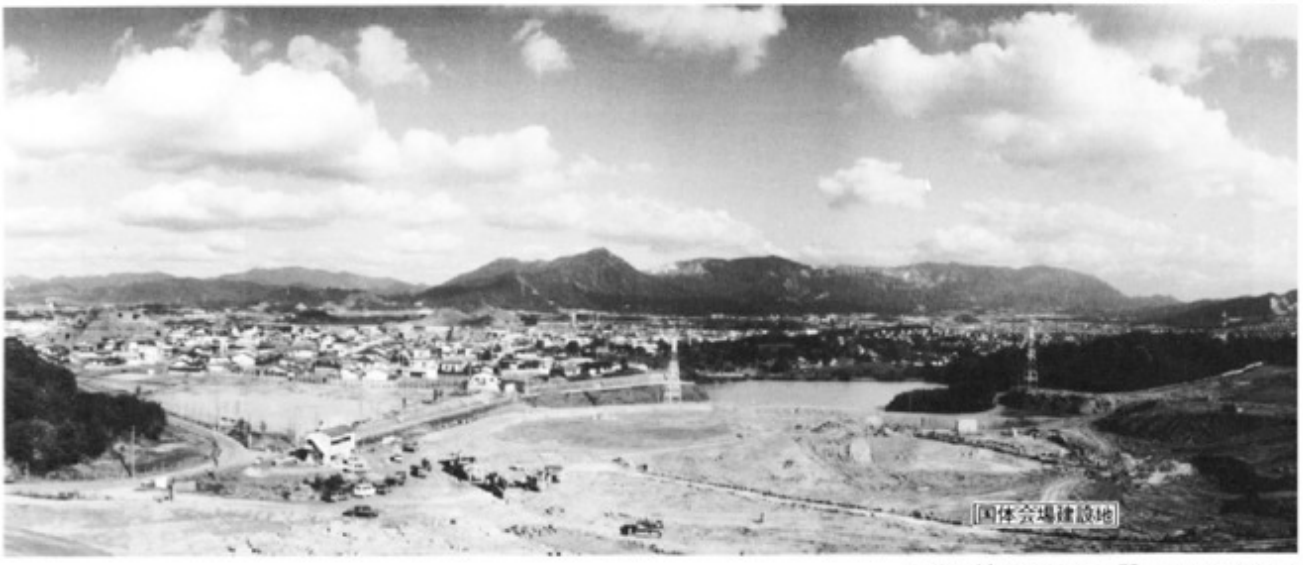
この外にも多くの人達からご援助いただきました。ありがとうございました。



2　席田遺跡群と周辺の古墳（縮尺1/50,000）

1　**席田丸尾古墳**
2　席田新立表古墳
3　席田貝花尾古墳
4　席田北ノ浦古墳
5　宝満尾古墳
6　剣塚古墳
7　郷廻八幡古墳
8　下月隈天神森古墳
9　持田ヶ浦古墳群
10　今里大塚（不動）古墳
11　御陵古墳群
12　荒葉古墳群
13　七夕池古墳
14　光正寺古墳
15　浦尻古墳群
16　湯沸古墳群
17　炭焼古墳群
18　大隈平塚古墳
19　部木古墳
20　天神森古墳
21　名島古墳

3 席田遺跡群周辺の航空写真



4 席田遺跡群より三郎、若杉山を望む

5 席田遺跡群の地形図（縮尺1/5,000）

6 席田遺跡群遠景（福岡空港上空から）

7　貝花尾1号墳

9　新立表2号墳

8　貝花尾2号墳

10　新立表3号墳

11　貝花尾、新立表古墳の遠景（南から）

第２章　発掘調査の記録

１．発掘調査の概要と経過

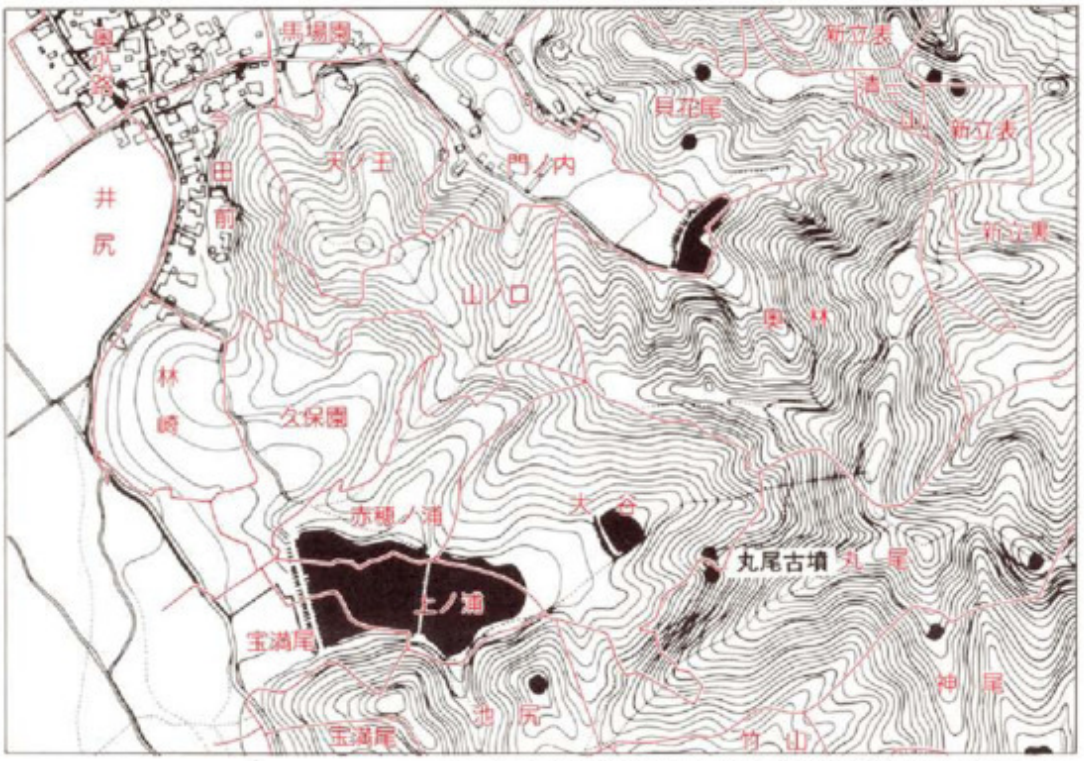
草スキー場建設予定地は、標高約85m の第１展望台から南西の席田中学校に向かって延びる丘陵の北西斜面に位置しています。北側約150 mには、別の丘陵が西に向かって延びており、間にＶ字形の深い谷を形成しています。北側丘陵の南斜面には赤穂ノ浦遺跡や、尾根上には第２次発掘調査で竪穴住居跡９軒、溝状遺構などを検出した大谷遺跡が対峙しています。谷の大半は、現在埋められていますが、昭和初期の地図によると、新池、上ノ浦池の外に、谷奥にもう一つの小さな用水池が見られ、調査対象地の旧地形は、北西方向への長い斜面をなしていた事がわかります。

公園建設課は、６月に草スキー場建設を文化課に通知し、これを受けて現地踏査したところ、建設対象地は、傾斜が強く、墳丘、石室などの痕跡も認められませんでしたが、数点の須恵器片を表採できた事、また周辺遺跡の分布状況などから遺跡の存在も充分に考えられました。赤穂ノ浦遺跡の発掘が終りに近づいた８月初めに試掘を実施したところ、２基の古墳を確認しました。12月より20日間の予定で本調査に着手し、この間に地下鉄の夜間調査も担当した事などで工事期日の迫った１月中旬に終了しました。２基の古墳は、発掘途中に草スキー場の中に取り入れる設計方針が提案されたために、発掘もできるだけ破壊を押える方法で行ないました。

12　発掘作業開始

13　丸尾１号墳の発掘作業

14　丸尾２号墳の発掘作業



15　席田遺跡群古墳分布図（昭和初期の地形図、縮尺約1/5,000）

16　丸尾古墳遠景（大谷遺跡から）

17 丸尾古墳トレンチ配置図（縮尺1/400）

18 丸尾古墳全景（南西から）

２．遺構と遺物

草スキー場の建設用地は約1,600㎡ですが、現地踏査、試掘調査の所見によって斜面裾部の松林を除く約1000㎡を調査対象としました。重機による表土剝ぎで２基の古墳を確認し、その検出順に丸尾１号墳、丸尾２号墳と呼ぶ事にしました。

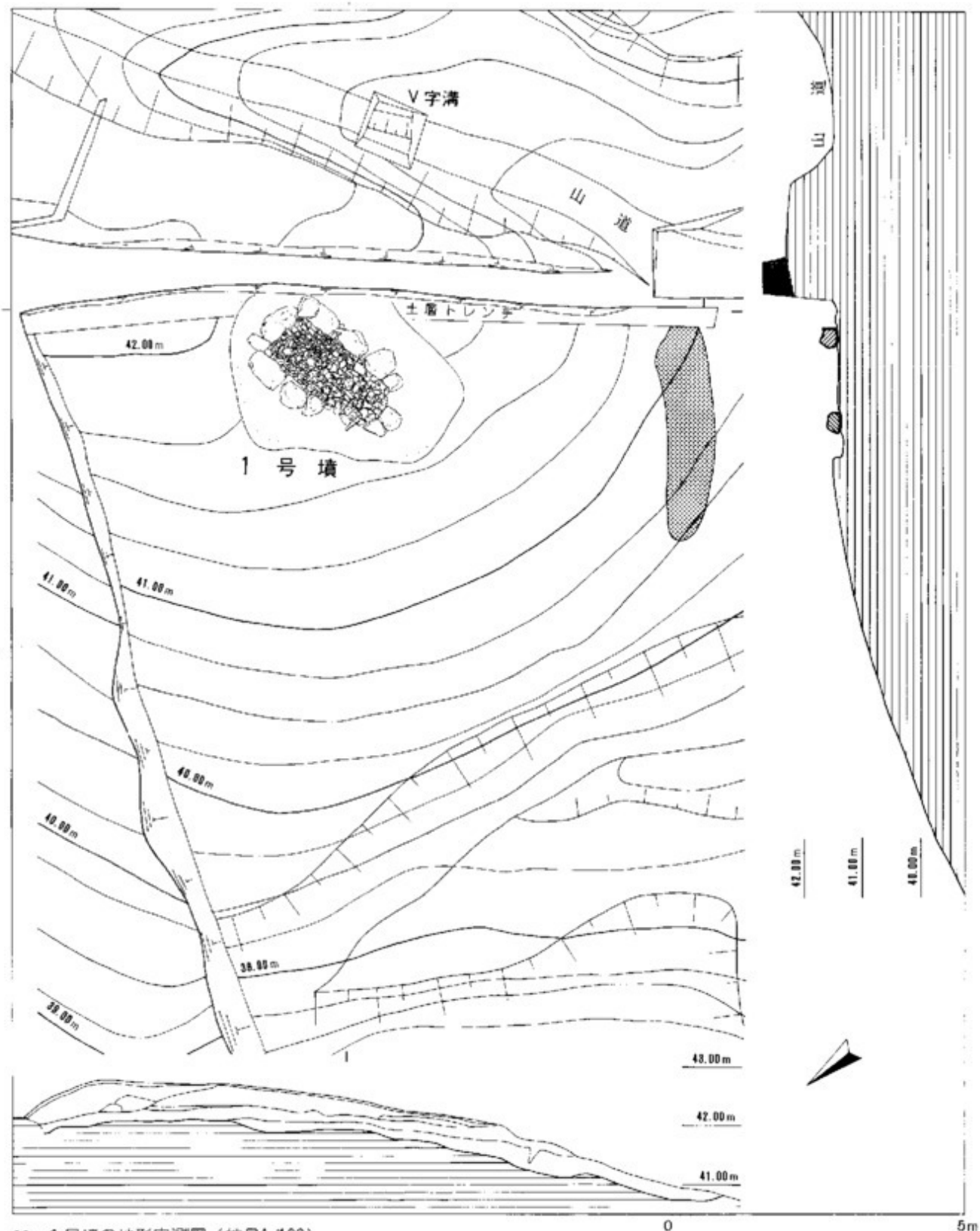
①　丸尾１号墳

１．墳　丘　１号墳は、調査対象地の北東隅、２号墳の北北西約15ｍに位置しています。東側に隣接して山道が通っており、東側から延びる斜面を切断しているために、視覚的には、わずかな高まりをなしているものの、その高さや規模は、墳丘と認定できるような形状ではなく、山道掘削時の排土による二次的な盛土ではないかと思われました。石室の掘り方に接して残した北東―南西方向の土層帯の観察によると、石室が掘り込まれている赤茶色土の地山上には、茶色土層と黄茶色土層の２層が地山と同じ傾斜をなしていますが、叩き締めたようすはなく、積極的に墳土とする根拠はありません。これは１号墳が、石室の腰石以上は、すべて破壊を受けている事からも墳土は残りえなかったと思われます。地山面の測量図によると、等高線は南西側に湾曲し一部円形をなすものの、２号墳に接する部分では南東側に流れており、かつ１号墳の東西方向の断面からも、地山整形は、石室掘り方周辺の小範囲に限られ、大規模な整形はなされていないようです。墳丘の規模とも関係するが、標高39.5ｍ前後に見られる溝状

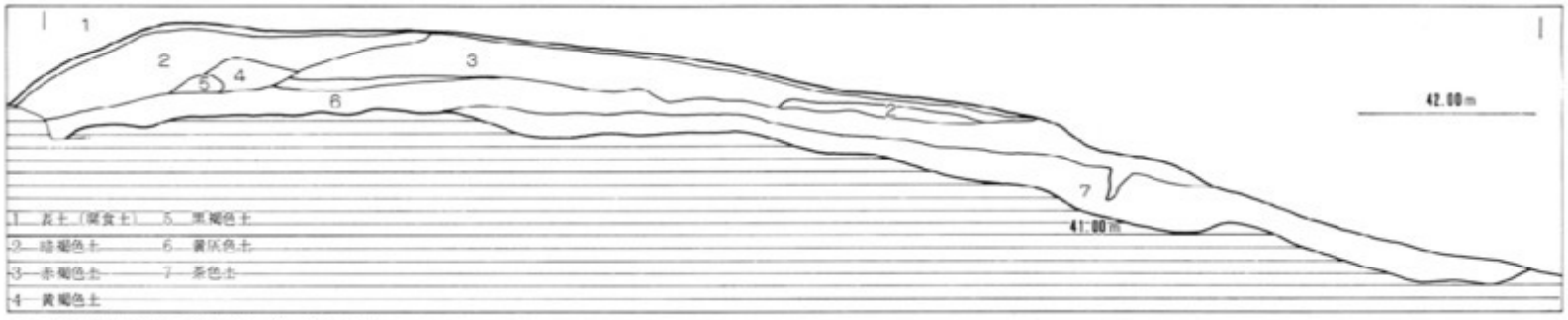
19　１号墳の発掘作業

20　１号墳の実測

21　１号墳の埋戻し



22 1号墳の地形実測図（縮尺1/100）



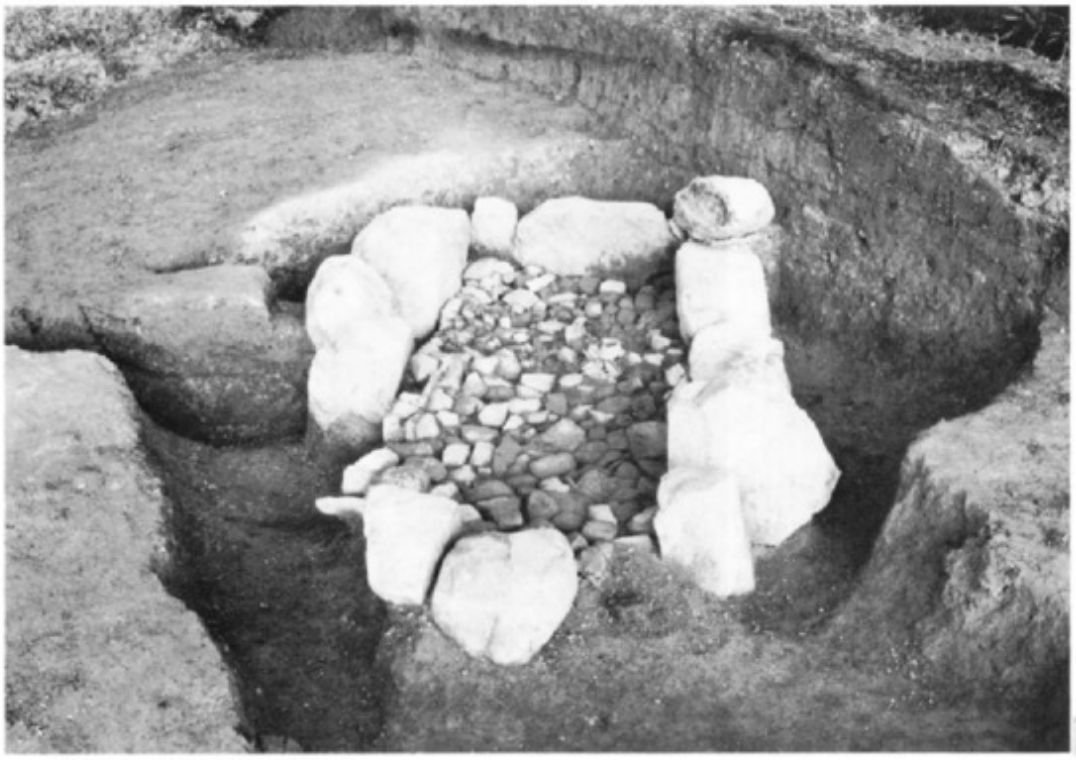
23 1号墳の墳丘断面図（縮尺1/30）

24 1号墳と墳丘断面（西から）

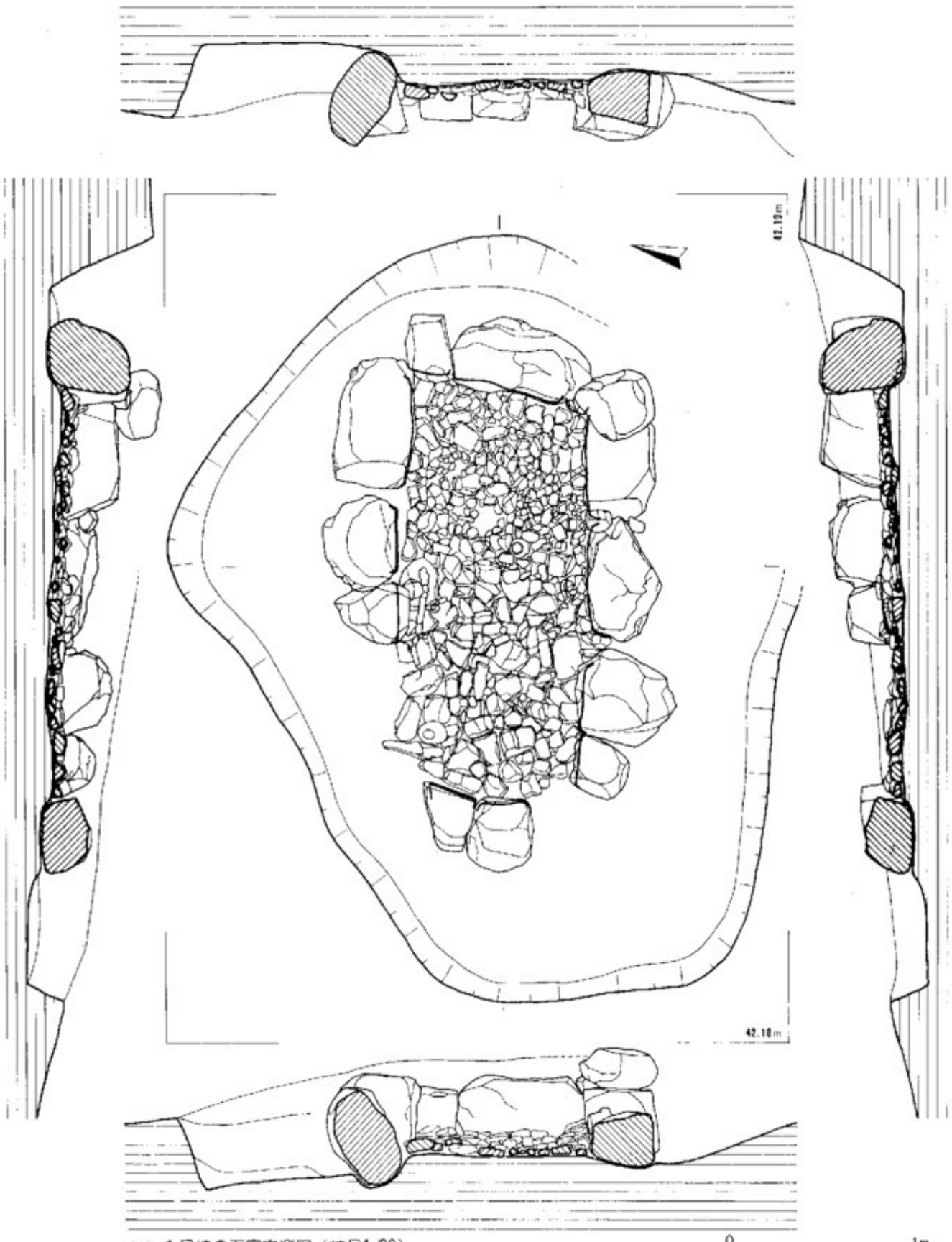
25 1号墳墳丘断面の実測作業

の段を1号墳築造時の整形とすれば、斜面下方からの眺めはかなり大きな墳丘と錯覚されたでしょう。また、石室の本来の高さがどれ程あったか知りえませんが、石室敷石面から墳頂までの高さを約1.5mと低く考えても墳丘は、異様に突出した形状をなしていたと推測されます。2号墳との間の標高41mには、深さ約5cmの浅い黒色土の落ち込みが見られましたが、周溝と判断するには至りませんでした。7号墳の墳丘は、円墳と思われますが、規模については現状では判断できませんでした。

2．石　室　1号墳の内部主体をなす石室は、大部分が破壊され腰石と敷石を残すのみですが、その構造から竪穴系横口式と呼ばれている石室に当ります。石室掘り方は、長軸410cm、短軸330cmの不整楕円形のプランを呈しています。埋土を観察できた石室北東側は、40cmの深さで、敷石部はやや高く整形されており、石室はこの掘り方の山側に片寄って構築されています。腰石は、すでに数個が失なわれ、現在12個を数えます。石室の長軸は北から東へ75度傾むき地山等高線とは直交していません。石室の内法は、長軸が225cm、短辺（小口）は山側、斜面側ともに95cmの長方形ですが、山側短辺の腰石は長軸に対して斜めに置かれており、整った長方形をなしていません。腰石は、平担面を内側に向け、わずかに内傾して据えられ、山側短辺には最も大きい石が使われています。床面は、山側がわずかに内傾して据えられ、山側短辺には最も大きい石が使われています。床面は、山側がわずかに高くなっており全面に敷石が見られます。敷石は、中央より東西で大きさに極端な違いがあります。横口部や石積みの構造が明らかではありませんが、腰石の配置や遺物の出土状況などから斜面側短辺を横口部と推測しました。



26　1号墳の石室（横口部から）

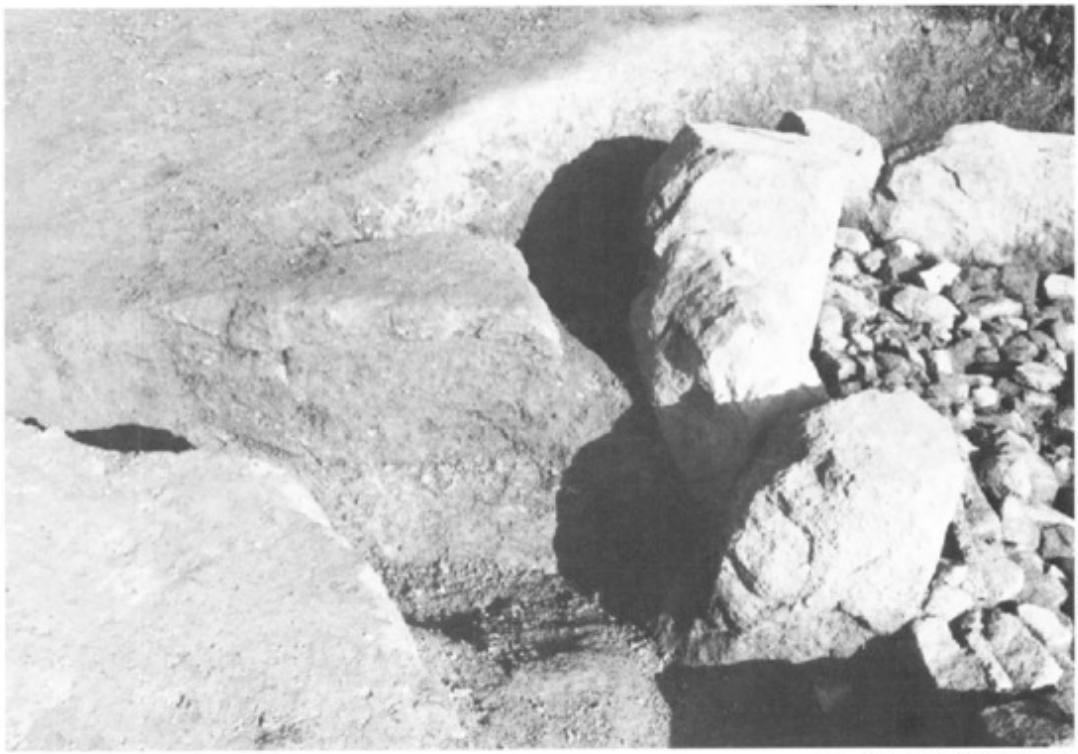


27 1号墳の石室実測図（縮尺1/30）

28　1号墳の石室（北東から）

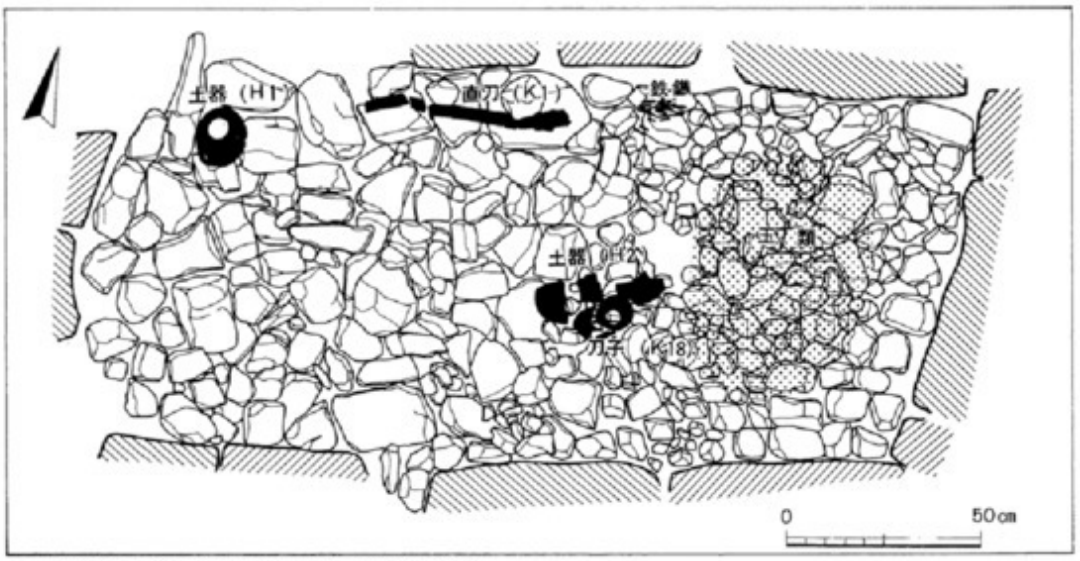
29　1号墳の石室（北から）

30 1号墳石室の奥壁



31 1号墳石室の掘り方

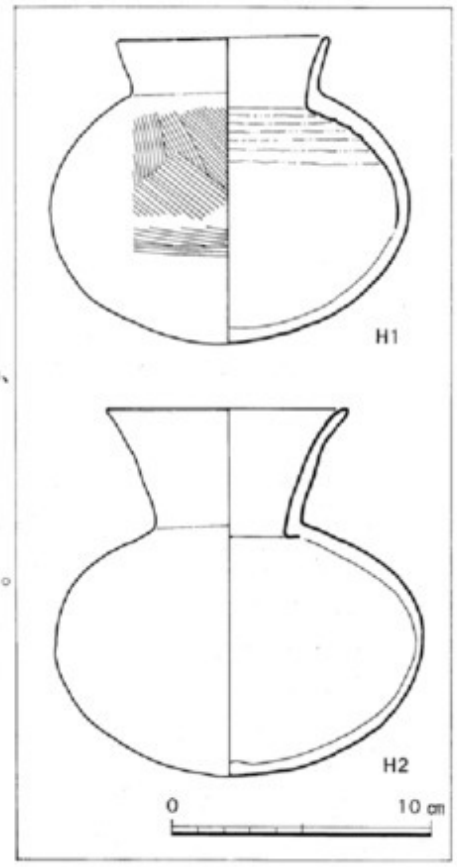
3．遺　　物　石室上部は大きく破壊されていたものの、敷石は荒らされてはいず、予想以上の遺物が出土しました。山側短辺を奥壁とすると左側壁に並んで直刀と鉄鏃、横口部付近で土師式土器の短頸壺、中央部で長頸壺と刀子、奥壁寄りで玉類が検出されました。これらが副葬品の総数であったかは、わかりませんが原位置からあまり動いていないと考えられます。



32　1号墳石室の遺物出土位置（縮尺1/20）

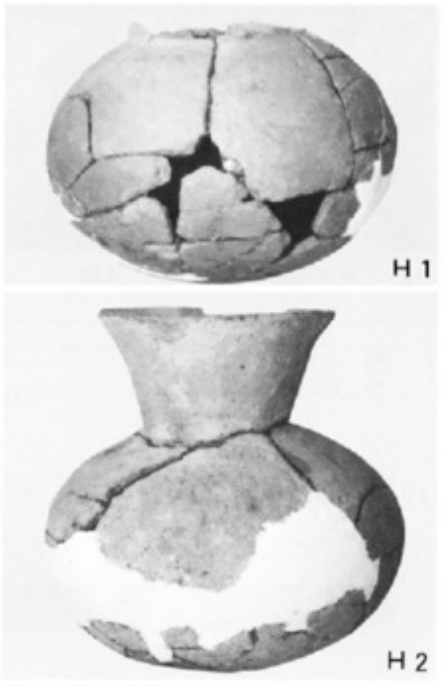
33　1号墳石室の遺物出土状況

土　器　石室の敷石上から２点の土師式土器が出土しました。Ｈ１は、横口部左側壁寄りで検出したもので、破片となっていましたが散乱していず接合復原できました。胴部は中位に最大径を持ち、上半の内傾が強い扁球形を呈しており、内湾ぎみに外反する短かい口縁部が付いています。胴部上半は粗いハケ目後に横ナデを加えて調整しています。内面上半には、粘土帯接合痕が観察できます。口径8.3cm、胴部最大径14cm、器高12cmで精良な胎土が使われています。Ｈ２は、石室中央部で出土したもので胴部はＨ１と同じような特徴を持っています。胎土は精良ではありませんが全体に丁寧な横ナデ調整がなされ美しい器形をしています。口縁部は直線的に外反し、さらに口縁部近くでわずかに外傾し長い頸部を作っています。口径9.4cm、胴部最大径は14.4cm、器高14.4cmを測ります。



34　１号墳出土の土器(壺)実測図（縮尺1/3）　▶

36　１号墳の土器(壺)出土状況



35　１号墳出土の土器(壺、縮尺1/3)

鉄　器　直刀1振・鉄鏃9本以上、刀子1本が出土しました。

直　刀　石室左側壁に平行して刃を壁側に向け出土したもので、鋒と茎を欠いています。現存する長さは約51cm、幅は約2.5cmを測ります。平造りで、棟から刃にかけてやや肉がつきます。錆化が著しく、何枚にも剥離してしまっています。

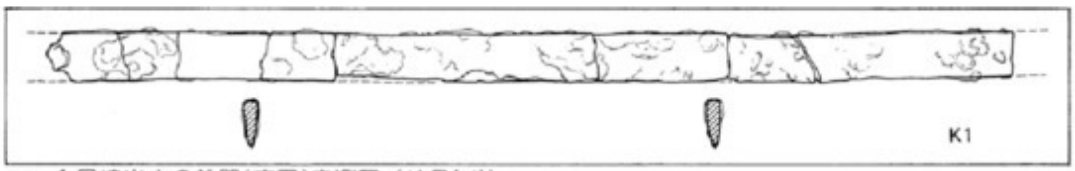
鉄　鏃　すべてが折れて、ひとかたまりになって出土しました。接合して完形になったのは3本のみですが、刃部を残す破片の数から、少なくとも9本はあったことがわかります。茎尻の破片数も9本ですので、総本数は9本と考えてもよいと思います。いずれも片刃の長頸式鉄鏃で、刃部と茎との間が長くのびた形式をとります。現存長は、K2で18.1cm、刃部長2.5cm、茎4.7cm、K3で17.7cm、2.8cm、7.3cm、K4で16.9cm、2.5cm、5.7cmを測ります。K2・4～6・13・14・16には、茎に木質が付着しています。特にK14・K16は、木質の上に木質の繊維に直交する方向（横方向）でまかれた樹皮が残っていました。石室床面で鉄鏃を検出した際には確認できませんでしたが、おそらくこれらの鉄鏃は箙に装着されたまま、言いかえれば矢を9本まとめて副葬されたものと思われますが、先述した様に鉄鏃は整然とそろっていたわけではないので、靫などに収められていたとは考えられません。

37　1号墳の鉄器出土状況（直刀）

38　1号墳の鉄器出土状況（鉄鏃）

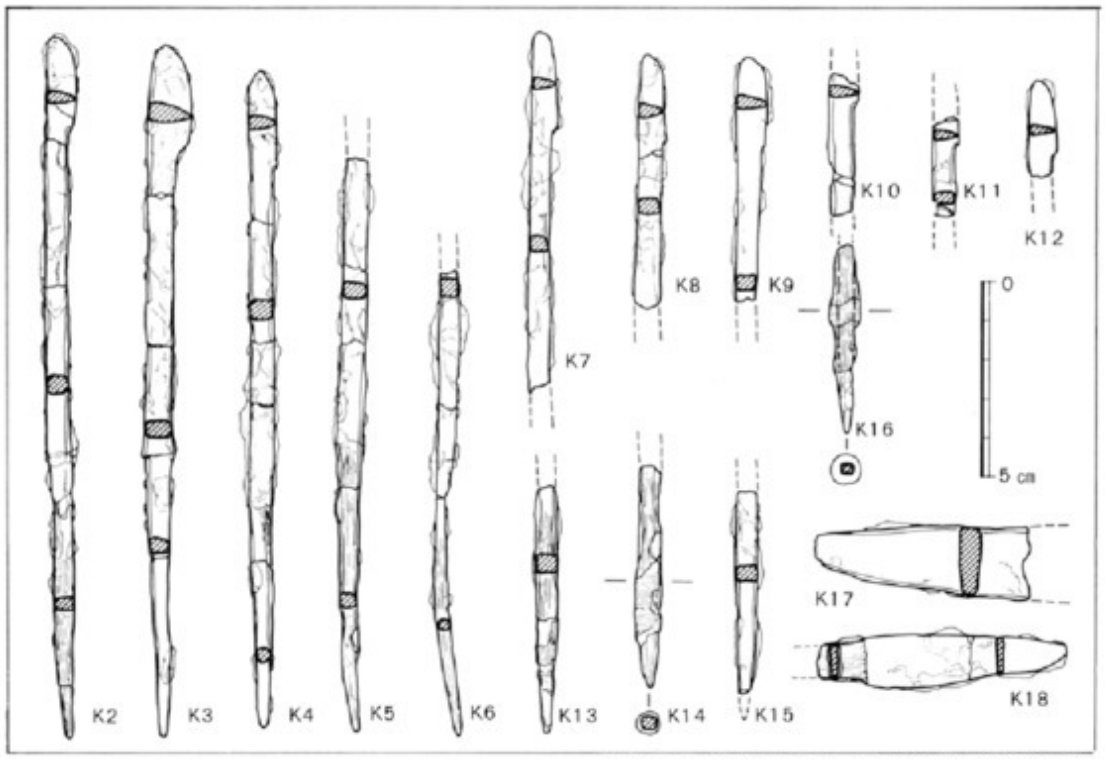
刀　子　K18は、直刀・鉄鏃とは離れて、石室の中央部で出土しました。現存長6.4cm、刃部5.1cm、区幅1.3cmを測ります。全体に薄い造りで、刃は鋭くありません。茎には木質が付着していますが、茎尻は欠失しています。

以上の他に、茎片K17が出土しています。

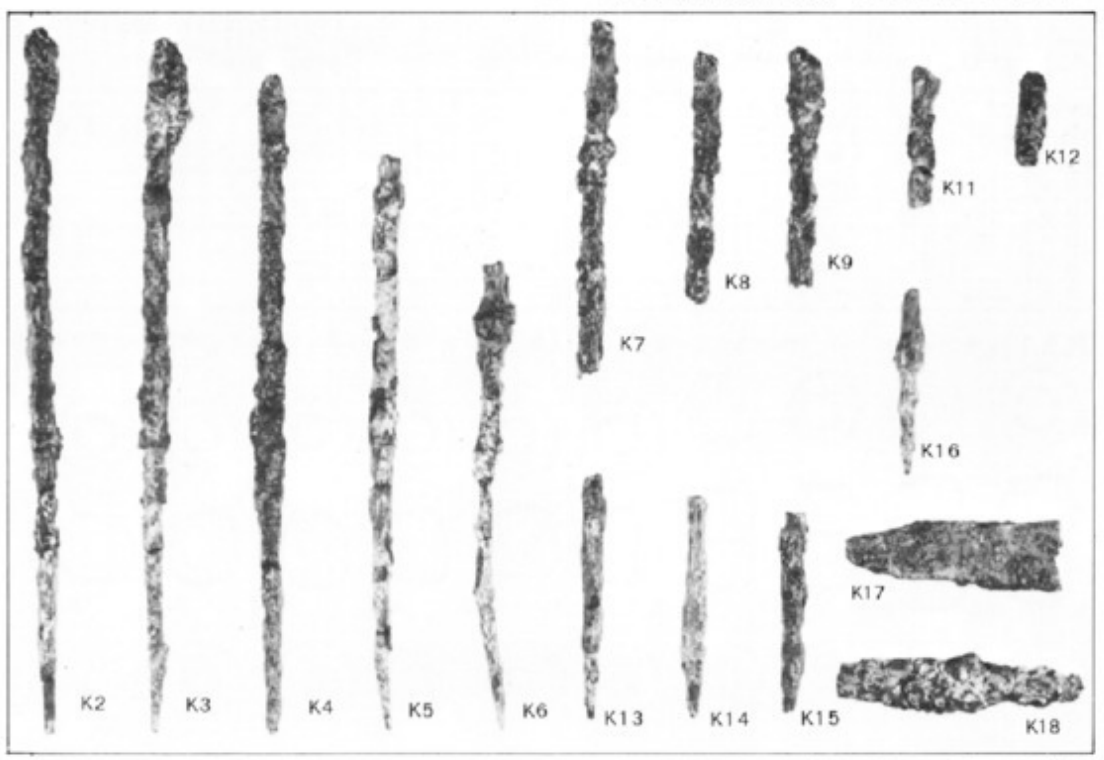


39　1号墳出土の鉄器（直刀）実測図（縮尺1/4）

40　1号墳出土の鉄器（直刀、縮尺1/4）



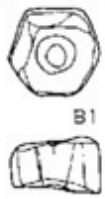
41 1号墳出土の鉄器(鉄鏃・刀子)実測図 (縮尺1/2)



42 1号墳出土の鉄器 (鉄鏃・刀子、縮尺1/2)

玉　類　玉類は、石敷の奥壁に片寄った部分で出土し、敷石下の土を洗浄して計686個を検出しました。かなり散乱しており、当時の連条状況はわかりませんが、この部分を被葬者の頭位と考えました。出土した玉類は、管玉、丸玉、小玉と瑪瑙製と思われる平玉があります。瑪瑙製平玉の側面は、平玉のように扁平ですが、横断面は六角に研磨されています。上下面は平坦でなく、穿孔は一方からのみ行なわれています。1個だけの出土ですが、大きく、かつ特異な形と材質から中心的な飾り玉だったと思われます。管玉、丸玉、小玉のほとんどはガラス製で大小の2種があります。B15～18は2連の丸玉で、切り離すための溝がつけられていますが、その上下は切り離されたままで研磨が加えられていません。

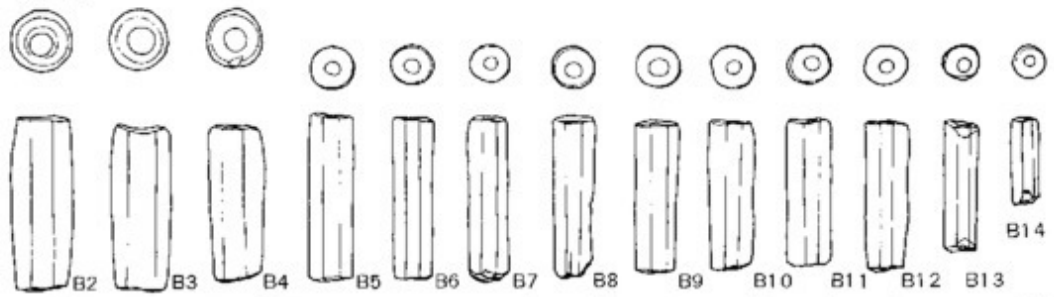
(平玉)



(単位cm)

No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 1	1.225	0.760	0.370	瑪瑙	濃いホみの橙

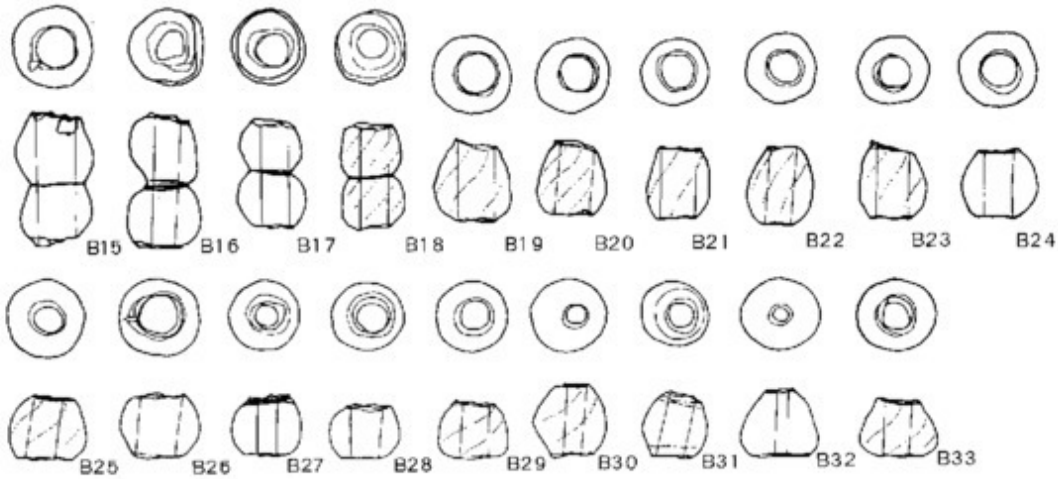
(管玉)



No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 2	0.810	2.255	0.375	ガラス	にぶい青緑
B 3	0.765	2.025	0.365	〃	〃
B 4	0.700	1.955	0.370	〃	〃
B 5	0.605	2.160	0.195	?	うすい青みの緑　軟質
B 6	0.590	2.130	0.195	〃	〃　〃
B 7	0.545	2.110	0.205	〃	〃　〃
B 8	0.560	2.000	0.215	〃	〃　〃

No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 9	0.585	2.010	0.210	?	うすい青みの緑　軟質
B 10	0.500	1.905	0.175	〃	〃　〃
B 11	0.580	2.080	0.185	〃	〃　〃
B 12	0.585	2.020	0.155	〃	〃　〃
B 13	0.480	1.700	0.195	〃	〃　〃
B 14	0.400	1.070	0.090	〃	〃　〃

(丸玉1) 2連で切り離した後、研磨を加えていないもの。　**(丸玉2)** 切り離して1個にし、上下に研磨を加えていないもの。

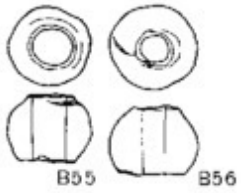


43　1号墳出土の玉類実測図と計測表（縮尺1/1）

No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 15	0.955 0.955	1.640	0.480	ガラス	くらい青
B 16	0.890 0.920	1.635	0.445	〃	〃
B 17	0.811 0.905	1.350	0.425	〃	〃
B 18	0.815 0.845	1.270	0.445	〃	くらい青・シマ文様
B 19	1.000	1.010	0.420	〃	くらい青・シマ文様
B 20	0.945	1.040	0.425	〃	〃 〃
B 21	0.885	1.050	0.430	〃	〃 〃
B 22	0.900	1.025	0.330	〃	〃 〃
B 23	0.885	0.970	0.365	〃	〃 〃
B 24	0.990	0.870	0.435	〃	〃 〃
B 25	0.990	0.833	0.365	〃	〃 〃
B 26	1.020	0.825	0.480	〃	〃 〃
B 27	0.886	0.800	0.285	〃	〃 〃
B 28	0.885	0.670	0.500	〃	〃 〃
B 29	0.960	0.730	0.380	〃	〃 〃
B 30	0.940	1.010	0.290	〃	〃 〃
B 31	0.935	0.825	0.325	〃	〃 〃
B 32	0.830	0.820	0.195	〃	〃 〃

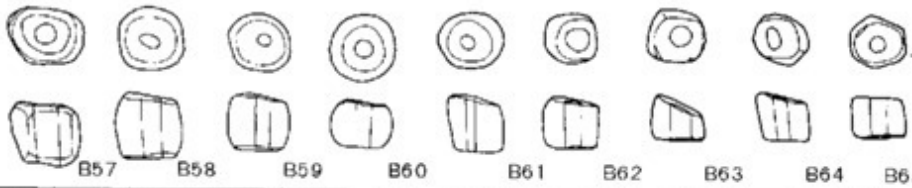
No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 33	0.955	0.815	0.355	ガラス	くらい青・シマ文様
B 34	0.905	0.865	0.425	〃	〃 〃
B 35	0.920	0.925	0.365	〃	〃 〃
B 36	1.150	0.815	0.495	〃	〃 〃
B 37	0.950	0.780	0.475	〃	〃 〃
B 38	1.010	0.745	0.465	〃	〃 〃
B 39	0.920	0.855	0.350	〃	〃 〃
B 40	0.900	0.860	0.395	〃	〃 〃
B 41	0.900	0.700	0.385	〃	〃 〃
B 42	0.945	0.880	0.425	〃	〃 〃
B 43	0.890	0.820	0.400	〃	〃 〃
B 44	0.875	0.775	0.365	〃	〃 〃
B 45	0.865	0.820	0.240	〃	〃 〃
B 46	0.930	0.760	0.405	〃	〃 〃
B 47	0.975	0.755	0.255	〃	〃 〃
B 48	0.900	0.715	0.315	〃	〃 〃
B 49	0.975	0.795	0.410	〃	〃 〃
B 50	0.880	0.730	0.320	〃	〃 〃
B 51	0.815	0.660	0.340	〃	〃 〃
B 52	0.895	0.800	0.365	〃	〃 〃
B 53	0.700	0.655	0.185	〃	〃 〃
B 54	0.890	0.725	0.230	〃	〃 〃

(丸玉4)
上下面に研磨を加え、横断面が不整円形をなすもの。



(丸玉3)
大きめの丸玉で、切り離し部分に研磨を加えたもの。

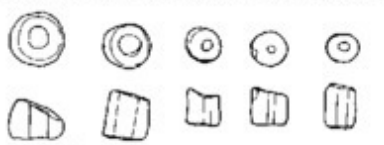
No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 55	1.105	0.830	0.500	ガラス	濃い紫の青・気泡
B 56	1.135	0.830	0.400	〃	ダークブルー・気泡



No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 57	0.880	0.725	0.300	ガラス	濃い紫みの青
B 58	0.855	0.820	0.230	〃	〃
B 59	0.780	0.715	0.210	〃	〃
B 60	0.865	0.570	0.210	〃	〃
B 61	0.755	0.765	0.180	〃	〃

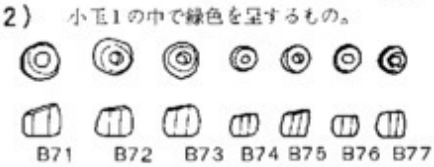
No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 62	0.740	0.635	0.285	ガラス	濃い紫みの青
B 63	0.740	0.550	0.300	〃	〃
B 64	0.710	0.670	0.255	〃	〃
B 65	0.750	0.480	0.200	〃	〃

(小玉1) 上下面に研磨を加えたもので円柱状のものがある。丸玉4を小さくしたもの、上下面は平行ではない。



No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 66	0.725	0.430	0.255	ガラス	濃い紫みの青
B 67	0.560	0.575	0.220	〃	〃
B 68	0.445	0.405	0.155	〃	〃
B 69	0.450	0.450	0.145	〃	〃
B 70	0.370	0.535	0.155	〃	〃

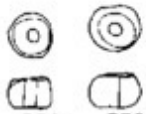
(小玉2) 小玉1の中で緑色を呈するもの。



No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 71	0.475	0.385	0.195	ガラス	さえた黄みの緑
B 72	0.490	0.370	0.200	〃	〃
B 73	0.450	0.340	0.175	〃	濃い黄みの緑
B 74	0.360	0.240	0.135	〃	〃
B 75	0.345	0.305	0.140	〃	〃
B 76	0.335	0.250	0.140	〃	明るい緑みの青
B 77	0.345	0.305	0.130	〃	にぶい緑

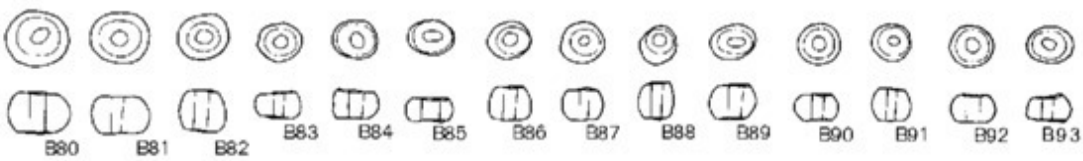
(小玉 3)

ガラス製ではないが石材不明。
2個のみ出土。



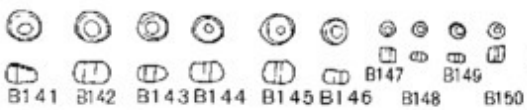
No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 78	0.585	0.385	0.155	不明	濃い赤みのブラウン
B 79	0.680	0.390	0.170	〃	〃

(小玉 4)



最も数が多く138個のうち61個を計測し
うち16個を図示した。上下面は平行をなす
が側面形はバラエティーに富む。

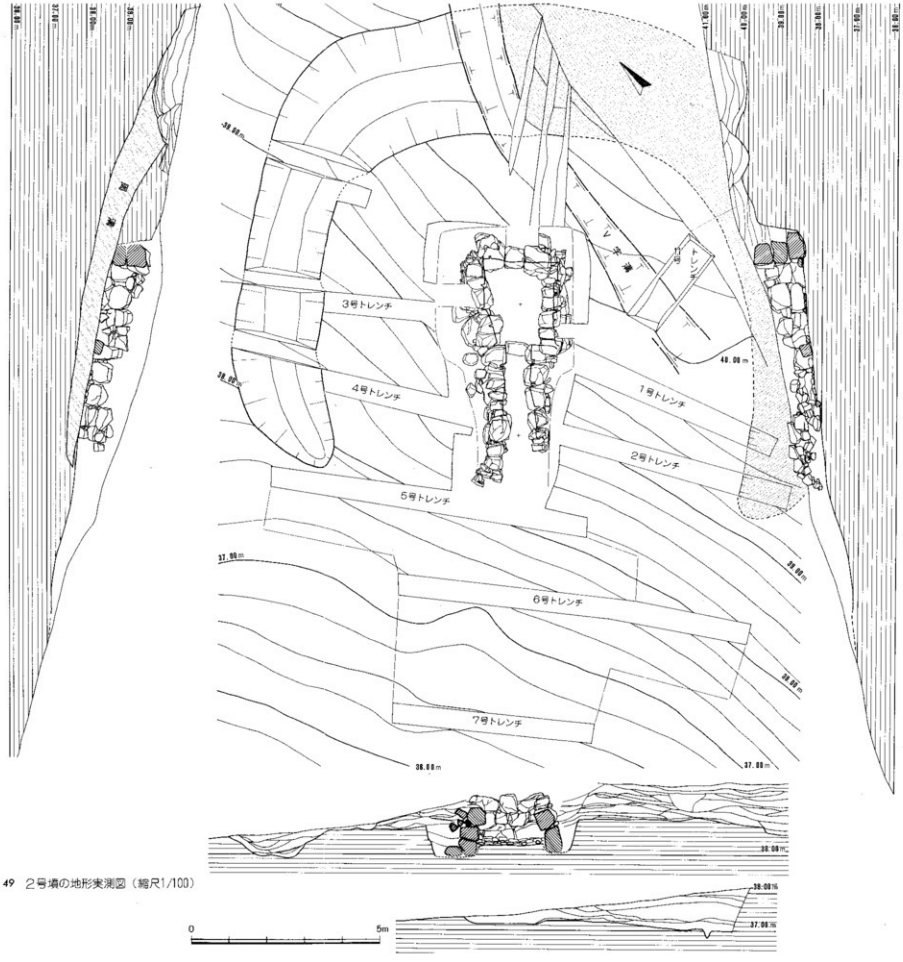
No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 80	0.765	0.480	0.200	ガラス	濃い紫みの青
B 81	0.700	0.415	0.180	〃	〃
B 82	0.660	0.515	0.215	〃	〃
B 83	0.570	0.315	0.180	〃	〃
B 84	0.555	0.325	0.175	〃	〃
B 85	0.585	0.260	0.215	〃	〃
B 86	0.525	0.440	0.180	〃	〃
B 87	0.545	0.375	0.200	〃	〃
B 88	0.480	0.475	0.180	〃	〃
B 89	0.555	0.420	0.190	〃	〃
B 90	0.525	0.325	0.195	〃	〃
B 91	0.475	0.385	0.150	〃	〃
B 92	0.540	0.325	0.200	〃	〃
B 93	0.570	0.385	0.165	〃	〃
B 94	0.510	0.385	0.150	〃	〃
B 95	0.520	0.350	0.255	〃	〃
B 96	0.490	0.365	0.235	〃	〃
B 97	0.495	0.330	0.200	〃	〃
B 98	0.570	0.370	0.215	〃	〃
B 99	0.550	0.310	0.130	〃	〃
B 100	0.490	0.365	0.145	〃	〃
B 101	0.470	0.470	0.145	〃	〃
B 102	0.520	0.380	0.190	〃	〃
B 103	0.500	0.440	0.160	〃	〃
B 104	0.500	0.365	0.165	〃	〃
B 105	0.485	0.400	0.135	〃	〃
B 106	0.485	0.400	0.160	〃	〃
B 107	0.400	0.395	0.100	〃	〃
B 108	0.500	0.320	0.205	ガラス	濃い紫みの青
B 109	0.505	0.385	0.045	〃	〃
B 110	0.445	0.345	0.145	〃	〃
B 111	0.445	0.360	0.145	〃	〃
B 112	0.485	0.380	0.180	〃	〃
B 113	0.470	0.360	0.155	〃	〃
B 114	0.485	0.300	0.160	〃	〃
B 115	0.460	0.495	0.150	〃	〃
B 116	0.465	0.330	0.165	〃	〃
B 117	0.465	0.280	0.140	〃	〃
B 118	0.455	0.275	0.105	〃	〃
B 119	0.445	0.335	0.135	〃	〃
B 120	0.445	0.320	0.150	〃	〃
B 121	0.430	0.325	0.150	〃	〃
B 122	0.430	0.380	0.115	〃	〃
B 123	0.400	0.350	0.145	〃	〃
B 124	0.455	0.280	0.200	〃	〃
B 125	0.430	0.300	0.145	〃	〃
B 126	0.405	0.300	0.140	〃	〃
B 127	0.450	0.310	0.165	〃	〃
B 128	0.420	0.365	0.130	〃	〃
B 129	0.480	0.220	0.205	〃	〃
B 130	0.460	0.245	0.195	〃	〃
B 131	0.450	0.320	0.170	〃	〃
B 132	0.475	0.305	0.145	〃	〃
B 133	0.400	0.380	0.155	〃	〃
B 134	0.440	0.290	0.120	〃	〃
B 135	0.430	0.350	0.120	〃	〃
B 136	0.440	0.310	0.195	〃	〃
B 137	0.400	0.344	0.165	〃	〃
B 138	0.420	0.315	0.175	〃	〃
B 139	0.410	0.350	0.070	〃	〃
B 140	0.435	0.285	0.150	〃	〃



(小玉 5)

小玉の中では最も小さく、B147~150は径が2mm前後と特に小さい。この他に444個出土した。

No	径	高さ	孔径	材質	色調・その他
B 141	0.415	0.185	0.185	ガラス	濃い青
B 142	0.410	0.260	0.195	〃	〃
B 143	0.390	0.205	0.175	〃	〃
B 144	0.370	0.230	0.140	〃	〃
B 145	0.420	0.265	0.090	〃	〃
B 146	0.300	0.150	0.140	ガラス	濃い青
B 147	0.225	0.190	0.125	〃	〃
B 148	0.220	0.080	0.140	〃	〃
B 149	0.200	0.100	0.120	〃	〃
B 150	0.185	0.160	0.100	〃	〃



49　2号墳の地形実測図（縮尺1/100）

② 丸尾2号墳

2号墳は、発掘区の中央部東寄りで検出したもので、1号墳の南西斜面側に位置しています。この付近には、数本の松が生え地表も挿図49のように緩やかに傾斜しており、古墳の存在は考えられませんでしたが、試掘によって、松の根元に数個の石が現われ、さらにコンテナ1箱分の須恵器片が出土した事から本調査に入りました。しかし、須恵器は広い範囲に散乱しており地山面が一部に露出しているなどから、石室の下部だけが辛うじて残った古墳と思われました。ところが発掘を進めるにつれて天井石はすでに失われてはいるものの、予想に反して墳丘、石室とも完全に二次堆積で埋没している事がわかりました。東平尾総合運動公園内における各施設の建設によって、これまでにいくつかの遺跡が消滅してしまいましたが、一方では自然景観を設計に生かす努力もなされており、今回も調査後は再び埋め戻し、墳丘を復原して芝を貼る事になりました。このため完全に破壊しないようにつとめました。

46 2号墳

47 2号墳

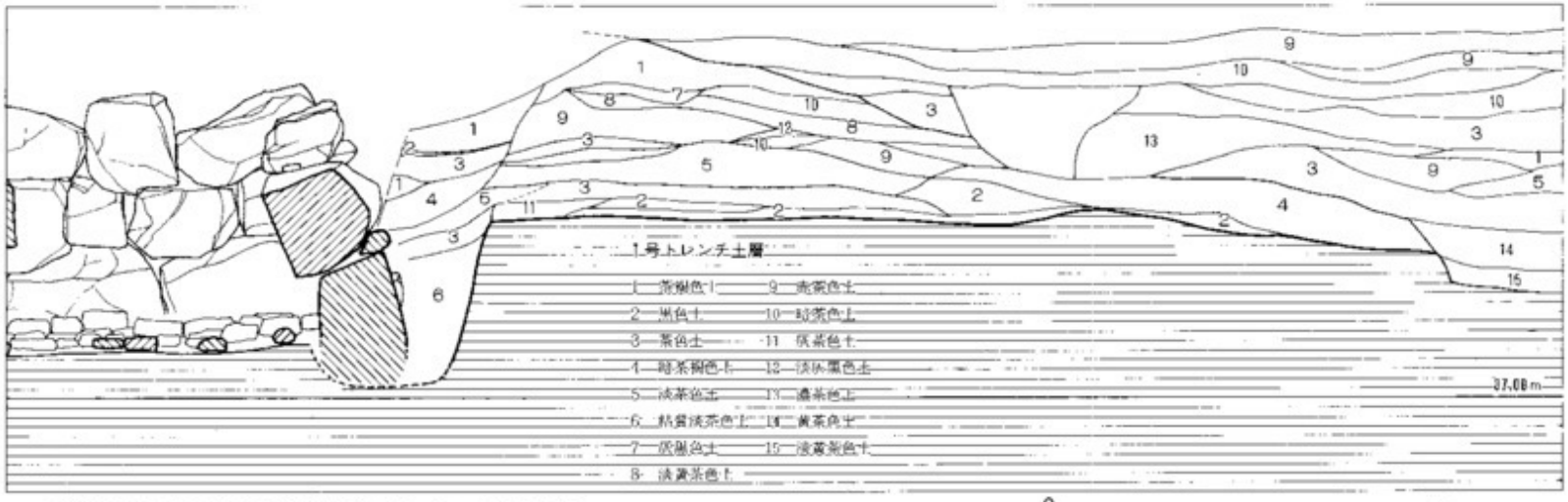
1．墳　丘　2号墳は、前述したように調査後再び埋め戻して保存する事から、墳丘盛土を取り除く方法ではなく、トレンチで規模や構築方法を観察しました。表土下の地山と二次堆積面の等高線は、挿図49で見られるように南側に向かってほぼ同じ間隔で流れており、その傾斜角は15度を測ります。トレンチは、周囲に計11か所設定し、このうち墳丘を横断しているのは1、3号トレンチと2、4号トレンチで、9、10号トレンチは玄室後方の墳丘を縦断しています。1号トレンチは玄室右側で、旧表土層から掘り込み、腰石を据え、約1mの高さに盛土し、改めて掘り込んで玄室を構築しています。墳頂部はすでに削平されていますが、墳裾部は堆積土で埋没して割りに残りがよく、石室長軸より約7mで逆台形断面の溝が掘られています。3号トレンチでも溝を確認しました。深さ55cm、幅2.6mで、石室長軸からは6.3mの位置にあります。2、4号トレンチは羨道横断のトレンチで、地山は平坦面をなし、この上に盛土が行なわれています。羨道右側の断面では墳丘が完全に残っており、盛土順序を知る事ができます。それによると、石室の裏込め的な盛土と墳丘の水平な盛土を交互に行ない墳丘を整えています。羨道左側の土層は、やや雑で水平な盛土ではありません。溝は、石室長軸より右側で6.5m、左側で6mの位置にあり、断面は緩やかな浅い皿状を呈しています。9、10号トレンチでは、2号墳の周溝と新しい時期のV字溝が重複して検出されました。6号トレンチでは、墓道と思われる浅い落ち込みが見られましたが、すでに墳丘盛土は削平流失していました。これらの事から、周溝内側の測定で、石室長軸線上で約11m、1、3号トレンチの横断線上で12mの墳丘規模が考えられ、ほぼ正円に近い形状をなしています。ただ地山面自体が南西方向に傾いている事から玄室上を墳頂部とするやや山側に片寄った墳形をしていたと思われます。

2．周　溝　1、2、3、4号トレンチで溝状の落ち込みが現われた事から、さらに8、9、10号トレンチを設定拡張しました。石室長軸より右側については、二次堆積で厚く覆われているために全容を検出したわけではありません。溝は、8号トレンチで大きく屈曲しており、1、2号トレンチでもその延長部を確認できた事から周溝と考えましたが、墓道側が閉じない馬蹄形をしています。最も残りのよい9号トレンチでは、幅3.3m、深さ1.1mを測ります。周溝端部との差は、約2.5mもの差があり、地山傾斜角度に従って掘られています。9、10号トレンチで周溝を切るV字溝は、1号トレンチで二次堆積土の中に掘り込まれており、後出の溝とわかりました。

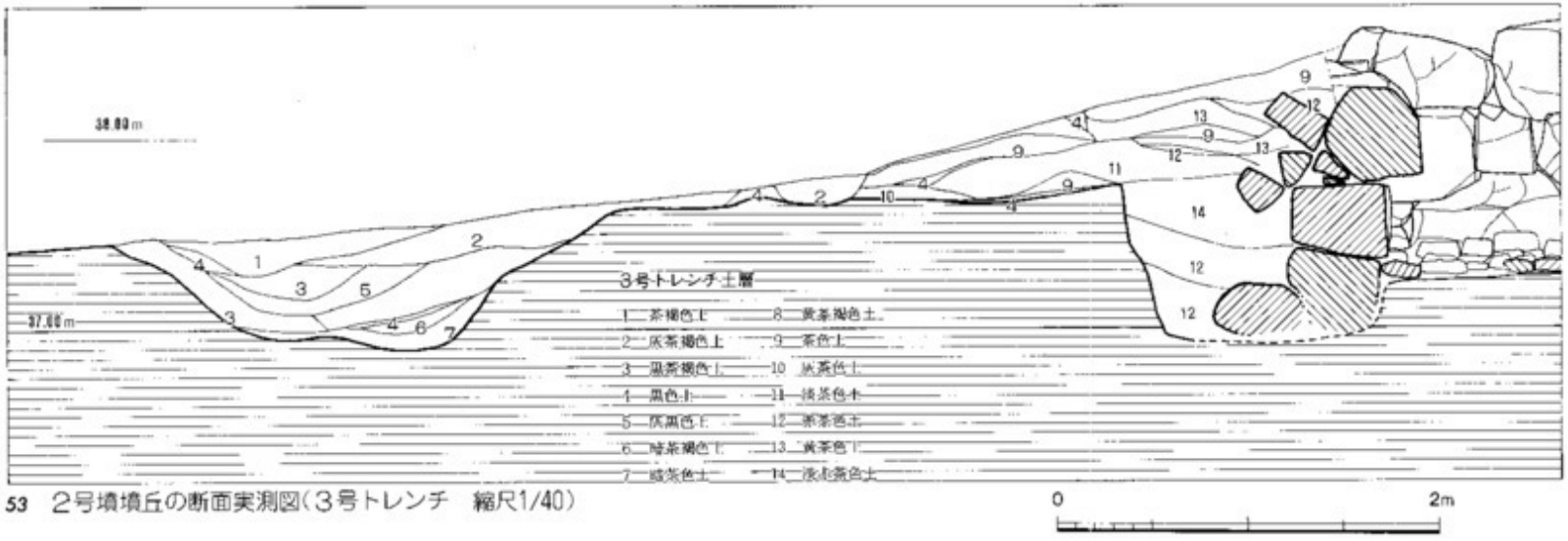
48　2号墳周溝の発掘作業

50 2号墳周溝の断面(4号トレンチ)

51 2号墳周溝の断面(9号トレンチ)



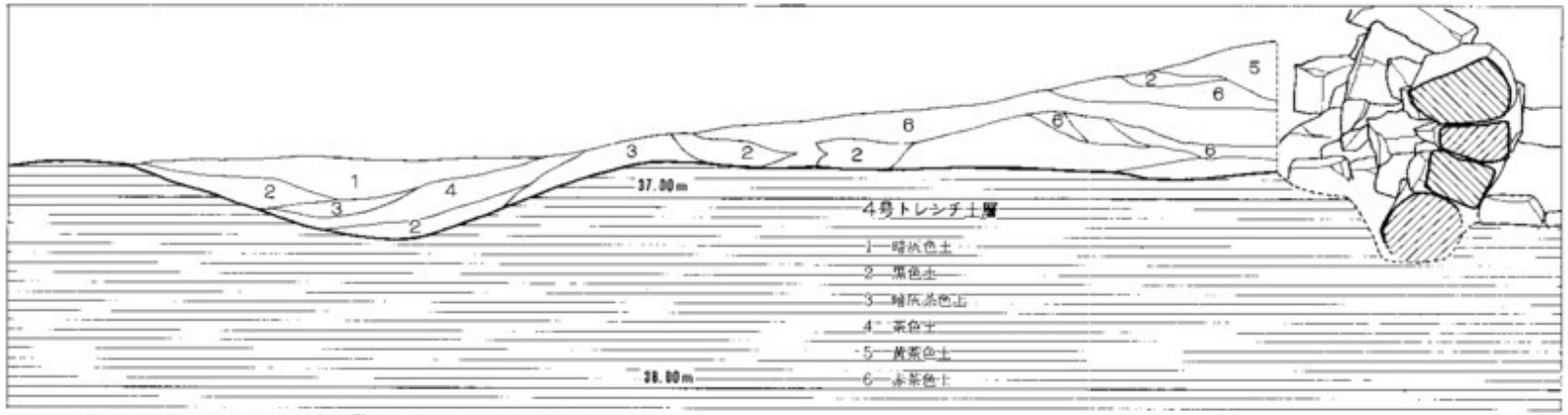
52 2号墳墳丘の断面実測図(1号トレンチ　縮尺1/40)



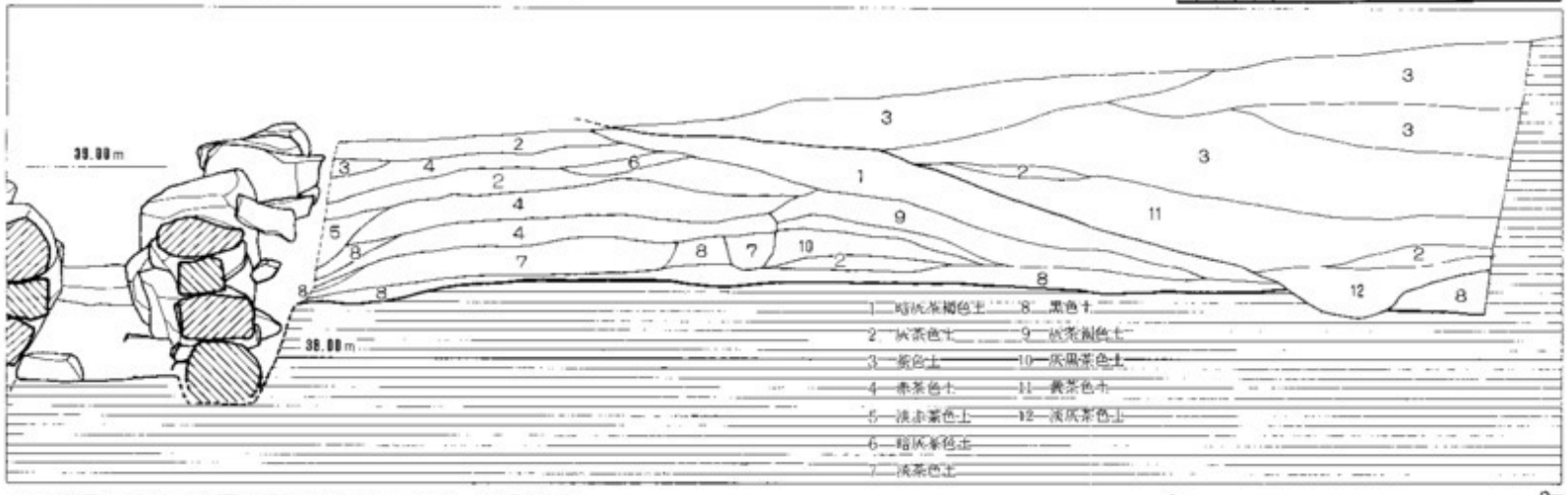
53 2号墳墳丘の断面実測図(3号トレンチ　縮尺1/40)

54 2号墳の墳丘土層(4号トレンチ)

55 2号墳の墳丘土層(2号トレンチ)



56 2号墳墳丘の断面実測図(4号トレンチ　縮尺1/40)



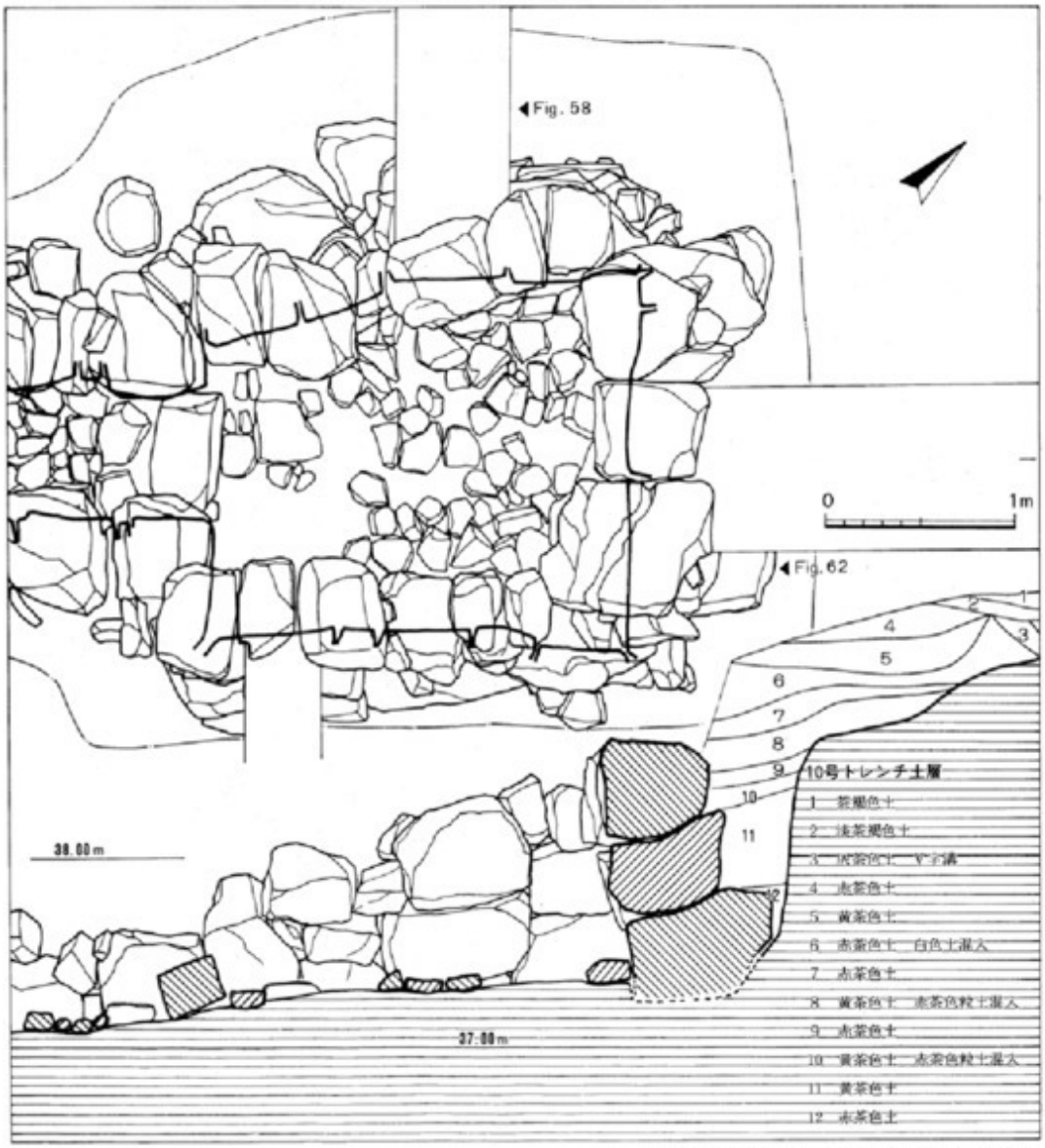
57 2号墳墳丘の断面実測図(2号トレンチ　縮尺1/40)

3．石　室

2号墳の内部主体は、単室両袖型の横穴式石室です。石室長軸は、北より東へ42度32分傾いています。玄室、羨道とも天井石はすでになく、土圧のためか石室の壁は著しく内傾しており、また落下している石も多かった事からサポートで保持するなど安全作業に注意しました。

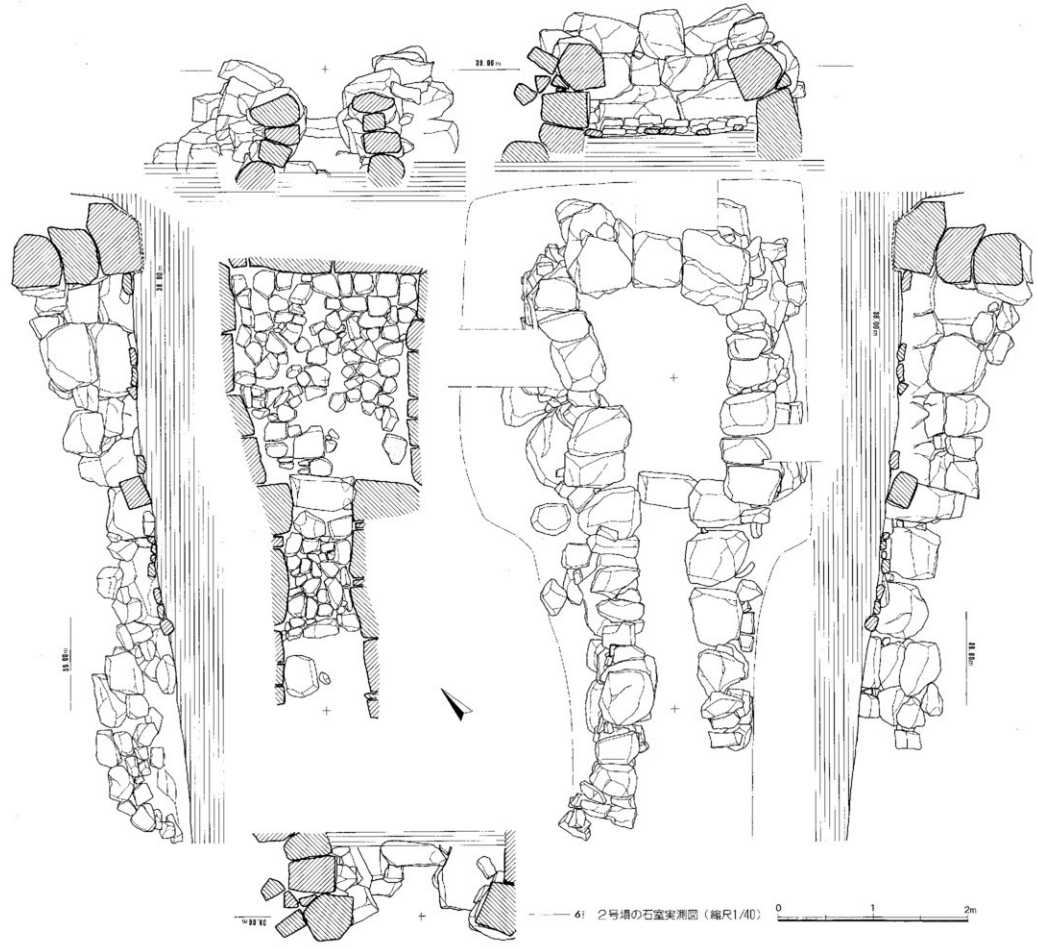
石室の掘り方　掘り方は、石室の形に合わせて羨道部を狭くした羽子板状をなしています。壁はほぼ垂直をなし、玄室部は水平な版築が行なわれており、墳丘よりも丁寧です。腰石部は一段深く掘り込み根石を置くなど安定が図られています。

58　2号墳玄室の堀り方土層



59　2号墳玄室の堀り方の実測図（縮尺1/40）

60 2号墳の石室全景



61　2号墳の石室実測図（縮尺1/40）

玄　室　墳丘盛土を完全に除去していないために地山整形がどのように行なわれたかは知りえませんが、1～4号の各トレンチで旧地表面が見られ、石室掘り方も狭く、深さも腰石より2段目の高さまでである事から、玄室奥壁部以外は大きな整形はなされていないようです。しかも玄室部だけを水平に保った整形で、玄門より羨道に向けては、地山面と同じ角度で傾斜しています。横穴式の石室は、平面が長方形の玄室に、ほぼ同じ長さの羨道が連接しています。

62　2号墳玄室の裏込め石

玄室は、奥壁幅2.01m、右側壁長2.21m、左側壁長2.33mで玄門側壁（前壁）幅は1.55mを測ります。腰石は、奥壁が3個、右側壁が6個、左側壁が4個使われ、内側の面をそろえて横に立てられています。左側壁の中程より袖石にかけては、石室長軸に対して平行せず斜めの壁線をなしています。現在、各壁は腰石から2～3段が残っており、左、右側壁とも奥壁側に大ぶりの石が用いられています。腰石の高さが水平でなく、また2段目の石も大小があり目路が通るような構築ではありません。持ち送りは、腰石の内傾に合わせて2段目から上部の石を合わせるというのではなく2段目の石は内側に大きくズレています。このズレは、

63　2号墳の玄室

石室崩壊時に起きたのではなく、右側壁の2段目石に支えが見られる事から、石室構築時にすでに生じたか、あるいは意図的な持ち送り角度であったとも推測されます。

玄室床面は、奥壁側がわずかに高くなっており、ほぼ全面に扁平な石が敷かれています。敷石は、奥壁側に接する部分では、整然と並んでいるものの、盗掘や後世の破壊で原位置から動いているようです。

奥壁は、左、右側壁に比べ目路を通す工夫がなされています。腰石は、平坦面を内側にし、安定よく横に据え上部の凹凸に合わせて2段目に大小の石を使いわけ、3段目横方向の目路を一致させています。また左、右側壁が、不整形の転石、割石を用いているのに対して、奥壁は方形に近い形状の石が使われ壁面を整えているのが特徴です。

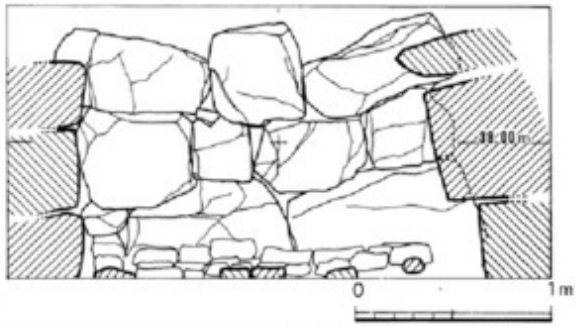
65 2号墳玄室の奥壁実測図(縮尺1/40) ▼

玄門には、やや大きめ石を立てて両袖としています。右袖が60cm、左袖が25cmの袖幅で右袖幅がいくぶん広くなっています。右袖石の高さは84cm、左袖は46cm、両袖間は70cmを測ります。右袖には右側壁との力石が見られますが、左袖にはなく、高さも違うなど原形ではないと思われます。

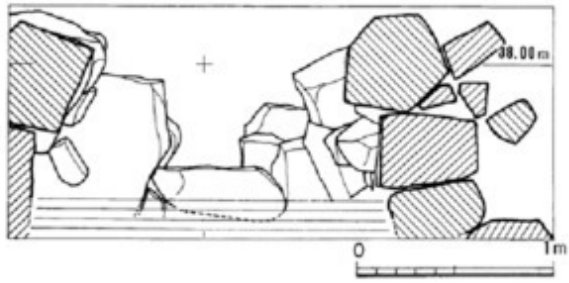
楣石は、両袖の間にいくぶん玄室寄りに幅34cm、長さ69cm、厚さ25cmの不整長方形の石を据えています。下部には2個の根石を置き水平になる工夫としています。奥壁からの長さは、214cmを測ります。

67 2号墳玄門の実測図(縮尺1/40) ▶

64 2号墳玄室の奥壁

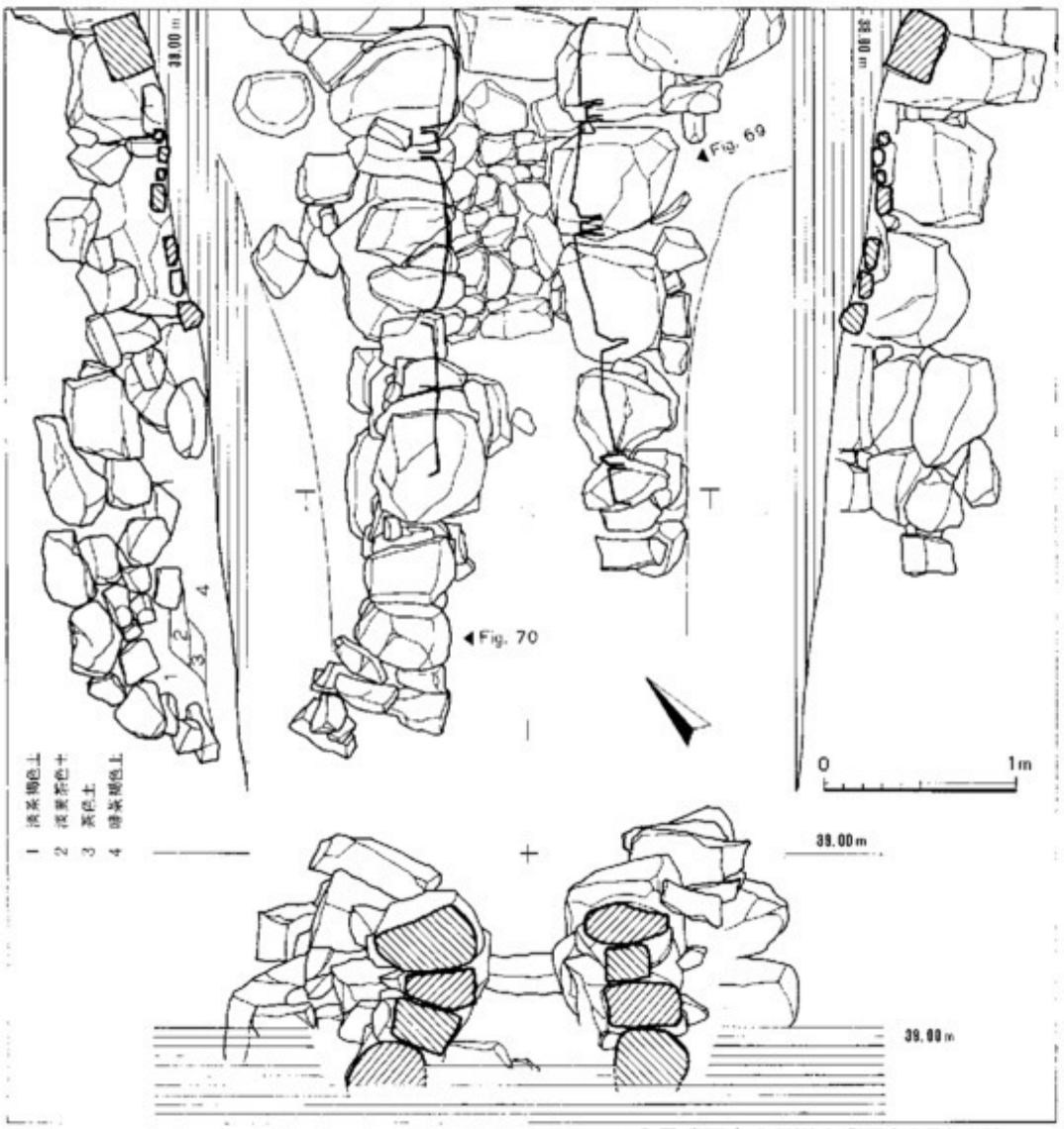


66 2号墳の玄門



羨　道　南西側に開口する羨道で、地山整形面は、開口部に向け約7度の傾斜があります。腰石は両袖とほぼ同じ幅で据えられ、右側壁が4個、左側壁が3個が用いられています。開口部幅は87cmを測り、玄門より17cm広くなっています。腰石の間には両壁とも小さな角礫が詰められていますが、持ち送りや構築方法に違いがあります。右側壁は、袖石より2個の腰石は大ぶりで、内傾の強い持ち送りですが、開口部付近は、垂直に近い持ち送りとなっています。

左側壁は、開口部まで内傾する持ち送りで、玄室右側壁と同じように支え石が置かれています。さらに腰石の代りに地山上に版築状に整地し、2～3段の石を積み上げた貼石があります。棚石より1.3mまで敷石が見られ、端部にはやや大きめの敷石があり、羨道の棚石的な意識があったのかも知れません。右側壁2.91m、左側壁3.82mを測ります。



68 2号墳石室の羨道実測図(縮尺1/40)

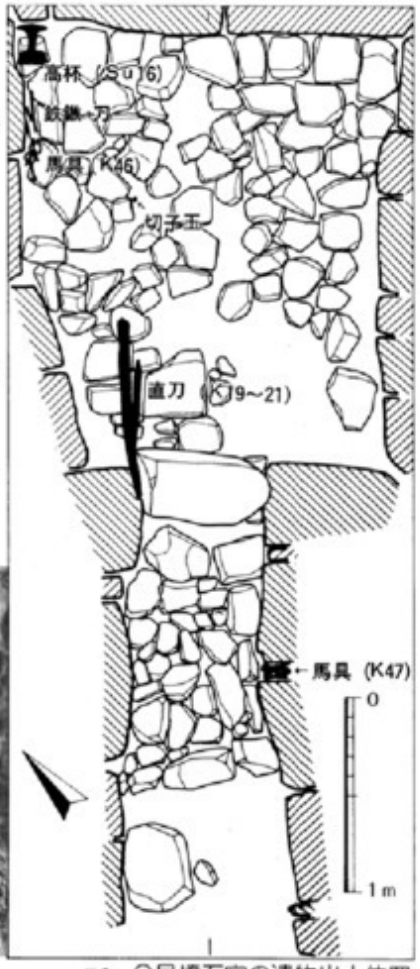
69 丸尾2号墳石室の羨道

70 丸尾2号墳石室の羨道

3．遺　物　すでに記したように、2号墳は早く盗掘に会い、玄室の敷石も荒らされ遺物は散乱していました。玄室では、左側壁にそって奥壁隅角から高杯、鉄刀、鉄鏃、馬具（轡）、玄門にかけて直刀、敷石の間から玉類。羨道では、右側壁腰石の間より馬具（鐙）、埋土より須恵器や鉄鏃が出土しました。また周溝や、墓道と考えた6号トレンチの落ち込みからは、須恵器片がまとまって出土しました。ここでは、踏査、試掘時に採集した遺物も一括して取りあげ、土器、鉄器、玉類の順に記します。

土　器　出土した土器は、すべて須恵器で土師式土器は含まれていません。須恵器の器種には、杯の蓋と身、高杯、𤭯、甕があり、さらに皮袋形をした特殊な瓶も出土しました。

71　6号トレンチの土器(𤭯)出土状況

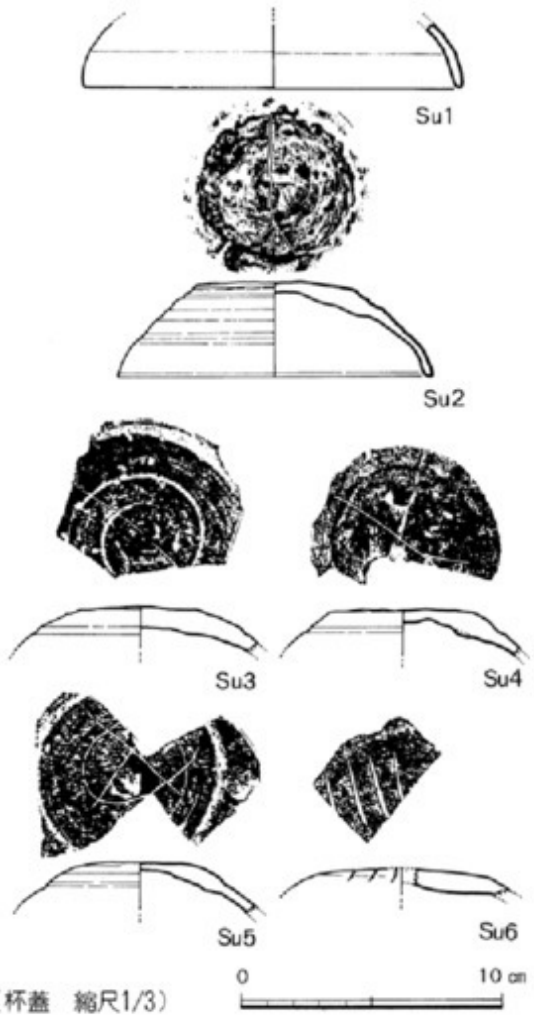


72　2号墳石室の遺物出土位置

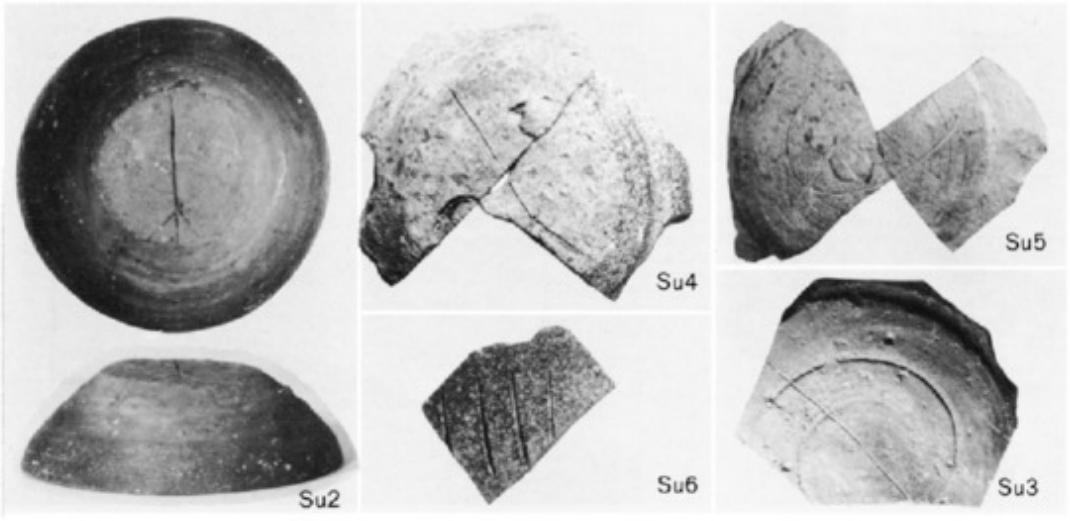
73　2号墳玄室の遺物出土状況（鉄器・須恵器）

杯 蓋　実測可能な破片はすべて実測しましたが、6点を図示しえたにすぎません。小破片のために杯身の底部と区別しにくいものがあります。**Su 1**は、砂粒が多めの胎土が用いられ外面は灰黒色、内面は灰色を呈しています。口縁端は丸い断面で、湾曲しながら内傾し、天井部との境には明瞭な段がなく、そのまま丸みのある天井部をつくるものと思われます。口径は14.6cm表採。**Su2**は、羨道の埋土より出土したもので、口径12.2cm、器高は3.8cmを測ります。口縁端は肥厚して丸く、体部と天井部との境は、内外面ともさらに明瞭でなく、鈍重なつくりをなしています。天井部はヘラ削りがなされていず、径約6cmに押しつぶしたように平坦になっており箒形のヘラ記号が見られます。

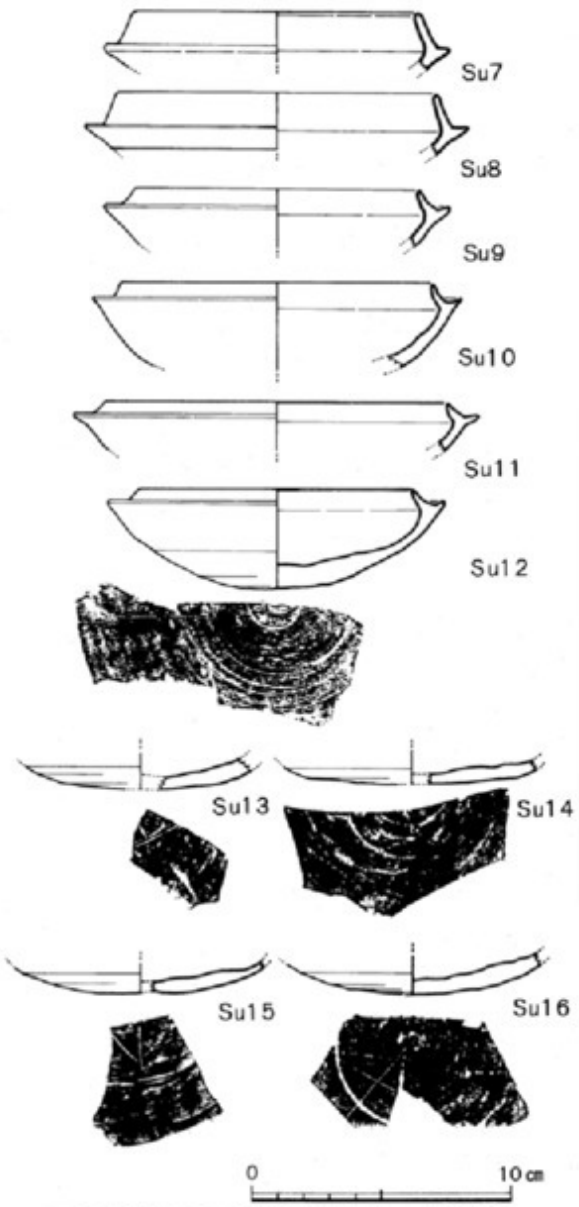
Su3、**4**は表採、**Su5**、**6**は、6号トレンチで出土しました。いずれも天井部にヘラ記号があり、**Su4**は**Su2**と同じような箒形をしています。



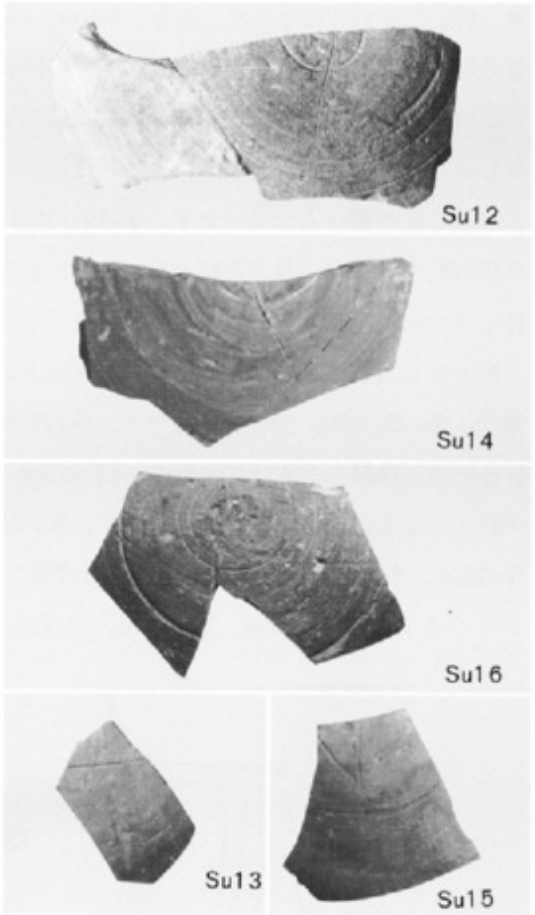
74 2号墳出土の土器実測図(杯蓋　縮尺1/3)



75 2号墳出土の土器(杯蓋　縮尺1/2、1/3)



76 2号墳出土の土器実測図(杯身 縮尺1/3)

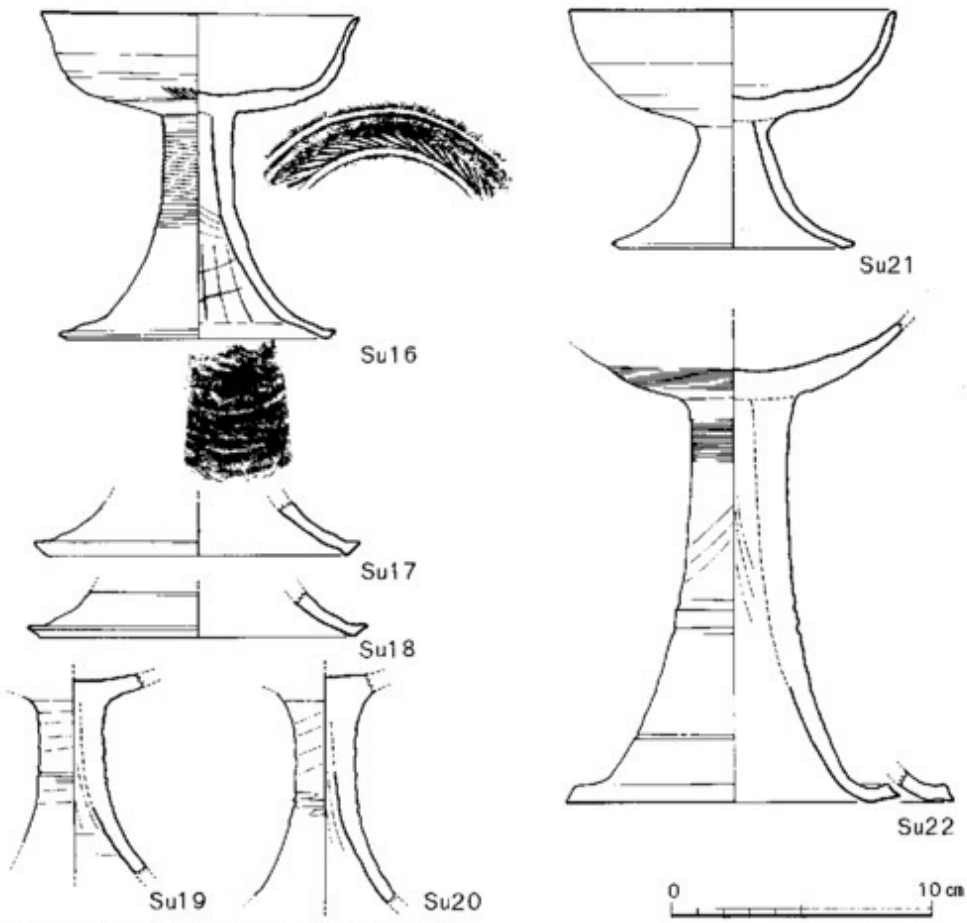


77 2号墳出土の土器(杯身 縮尺1/2)

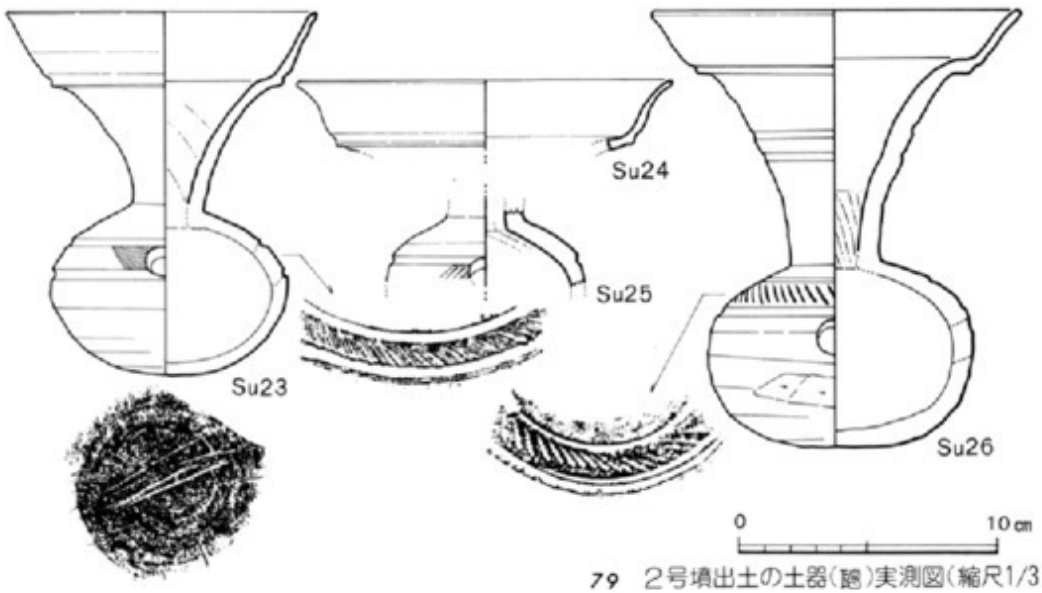
杯 身 10点を図示しましたが、いずれも破片で完形品はありません。これらのうち**Su7、8、10、11、13、15、16**は6号トレンチ、これ以外は表採したものです。**Su7、8**の口縁部は直線的に内傾し、受け部は厚めで、水平に突出しています。 **Su8**の口縁断面は丸細くなっているのに対し、**Su7**はそのまま丸くおさめています。口径は**Su7**が11cm、**Su8**が14.4cmを測ります。**Su9、10**の口縁部は、受け部が斜め上方に小さく突出し、口縁部への立ち上がりは内傾が強く、中位から屈曲して上方に立つという同じ特徴を持っています。丸みのある底部がつくのでしょう。Su9の口径は11cm、Su10は12cm。**Su11**の口径は13.6cmと大きめで、受け部と立ち上がりとのなす角度がさらに開き、短かい立ち上がりとなっています。精良な胎土が用いられており、堅緻な焼成となっています。**Su12**の受け部は、さらに短かくなり、口径10.6cmを測ります。**Su13～16**の底部には、ヘラ記号が見られますが杯蓋の可能性もあります。

高 杯　7点を図示しましたが、Su 16、21は接合完形品です。**Su 16**は、無蓋高杯で玄室奥壁の左隅角で出土しました。口径12.6cmの杯部は、中位に浅い1条の沈線がめぐり、この下部には斜行する櫛状圧痕を施しています。器高は12.8cm、脚端径は10.8cmを測り、脚筒部内面にはしぼり痕が見られ、脚裾部にはヘラ記号が付けられています。**Su 17、18**は、脚端部片でSu17には透し孔が開けられています。**Su 19、20**は、小型の脚筒部で中位に浅い沈線があります。**Su 21**は、脚が短かい無蓋高杯で杯部は、大きく変形しています。**Su 22**は、脚長15.8cmの有蓋高杯です。杯部上半は欠失しており、杯部下半と脚筒部上半にはカキ目調整、内外面ともにしぼり痕が見られます。Su 17、18、19は、6号トレンチ出土。Su 20、21、22は、試掘時の表採です。

腿　Su 23、26は、接合完形品です。**Su 23**は、球形の体部に直線的に外反する頸部が付き、段をつけて口縁部へと延びています。口径12cm、器高14.2cm、試掘時の表採です。胴部下半はヘラ削りで底部にヘラ記号が見られます。**Su 24、25**は6号トレンチで出土した小破片です。**Su 26**は、6号トレンチで押し潰された状況で出土しました。胴部は扁球形で½がヘラ削りされています。口径14.4cm、器高17cm、胴部径10.3cmを測ります。

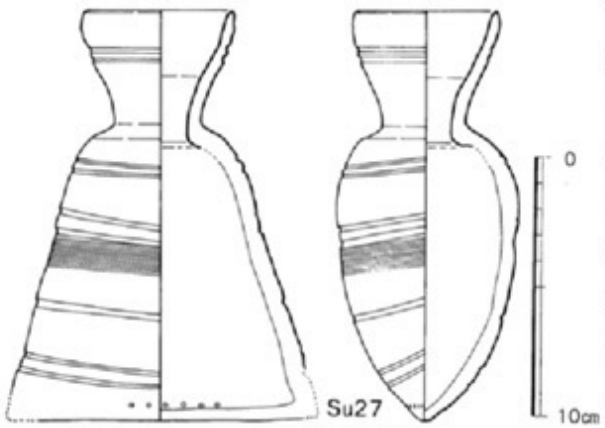


78 2号墳出土の土器(高杯)実測図(縮尺1/3)



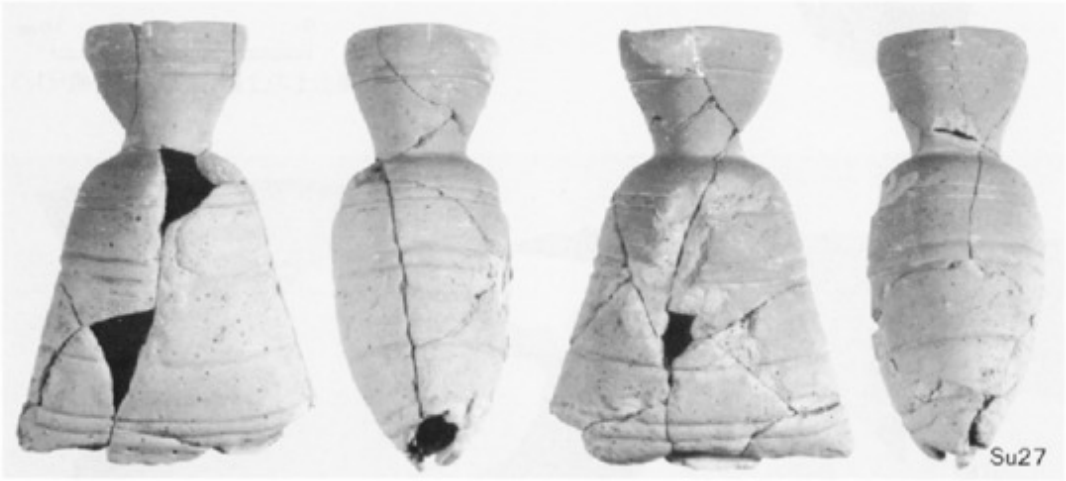
79 2号墳出土の土器(脚)実測図(縮尺1/3)

80 2号墳出土の土器実測図(高杯 脚 1/3)



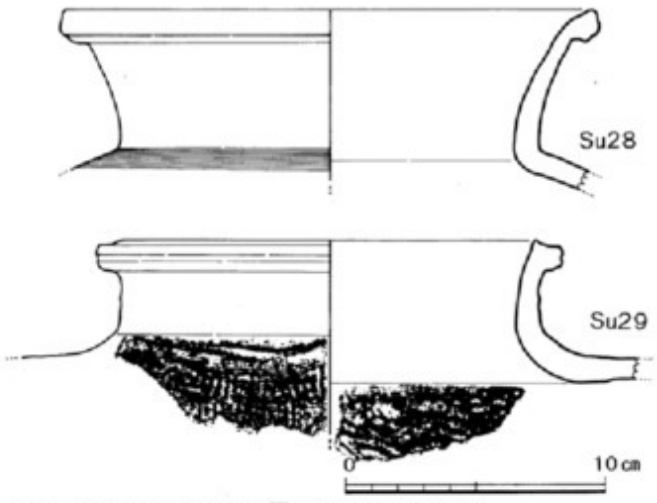
81 2号墳出土の土器実測図(縮尺1/3)

皮袋形瓶　試掘時に表採したもので一部破片が足りないものの接合復原できました。小さな砂粒の入った胎土で、焼成が十分でないのか、やや軟質な器面をなしています。口縁部は通例の形状ですが体部は紙袋状に底部が両側から合わされ、刺突文が並んでいます。これは皮袋の縫目を表現したものと思われます。口縁部、胴部に9条の沈線が施される外は特別な表現はありません。器高16cm。

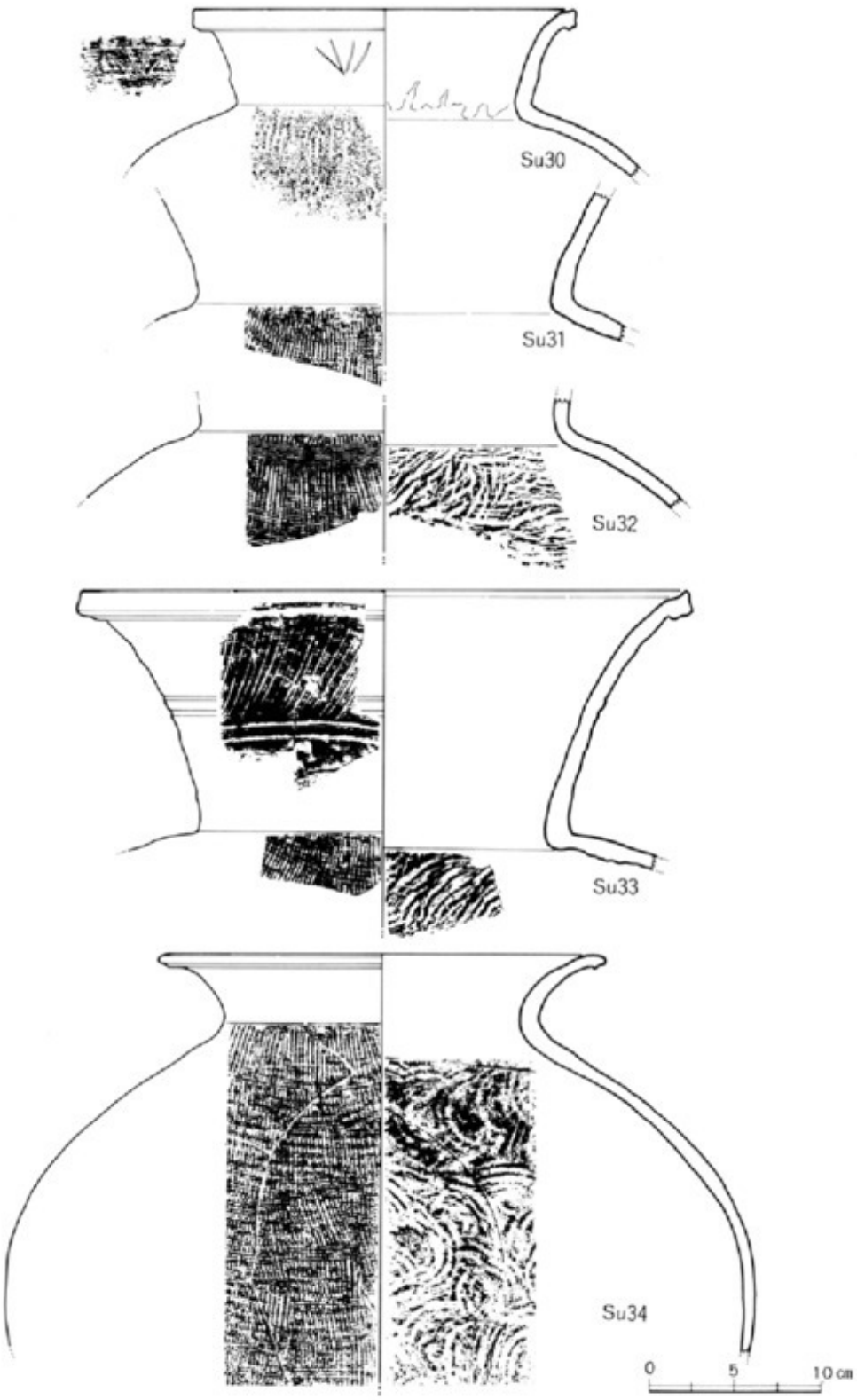


82 2号墳出土の土器(縮尺1/3)

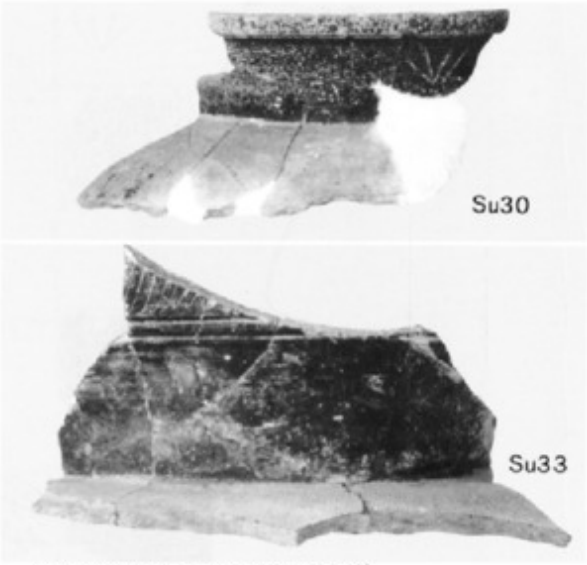
甕　器形が大きい事もあって、出土した須恵器の中では最も数量が多いものの、口縁部が実測できたのは7点にすぎません。**Su28**は、6号トレンチ出土。口縁端部は下向きの口唇状断面をなし、上方に小さく突出する特徴を持っています。口径24.2cm。**Su29**は、直立ぎみの短かい口縁部がつく甕で、体部外面は平行タタキ目を横ナデで消して調整しています。口径18cm。



83 2号墳出土の土器(甕)実測図(縮尺1/3)



84 2号墳出土の土器(甕)実測図(縮尺1/4)



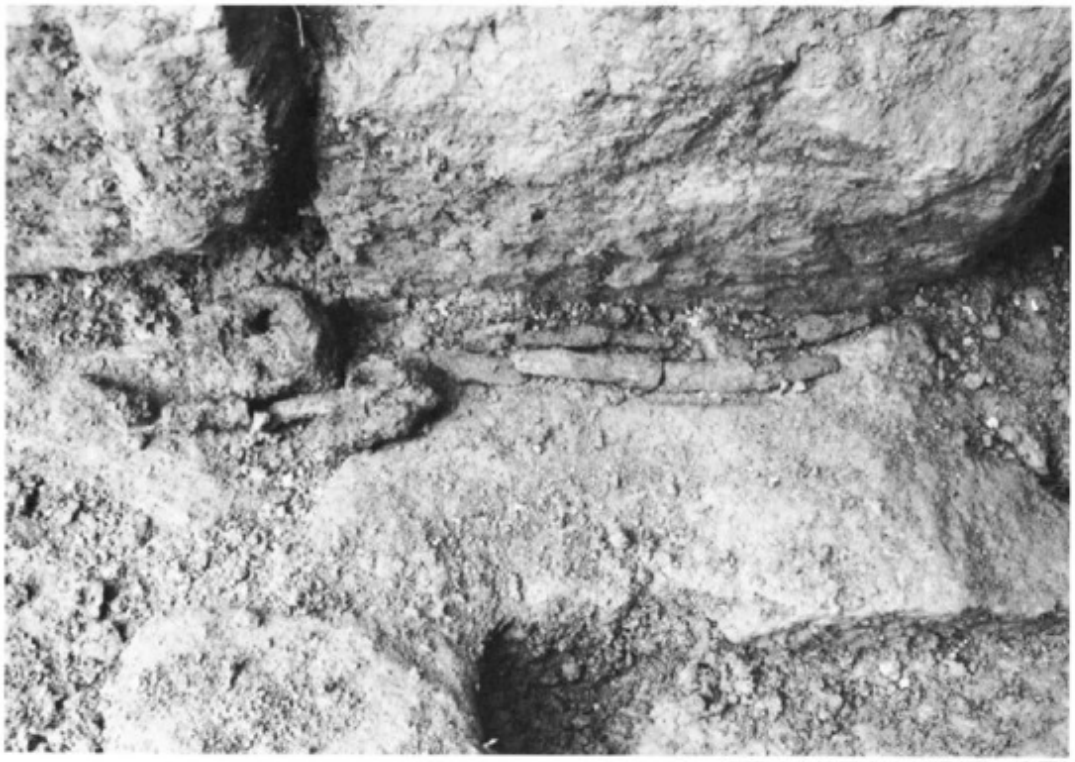
85 2号墳出土の土器(縮尺1/4)

Su30は、胴部より強く屈曲し、直線的にのびる口縁部がつく。胴部は灰色、口縁部外面は黒色、内面には自然釉がかかっている。胴部外面の調整は、タタキ目を細かいカキ目で消しています。内面も同じように同心円圧痕の後に横ナデを加えて全体に丁寧な調整となっています。また口縁部下方にヘラ記号が見られます。口径22.2cm。Su31は、頸部の破片で、く字形に屈曲しています。胎土は砂粒が少なく、堅い焼成で外面は灰色を呈しています。胴部外面は平行タタキ目、内面は同心円圧痕。Su32も頸部と胴上半部の破片で、頸部は直立ぎみにのびています。頸部は横ナデ、胴部外面は平行タタキ目の後にカキ目を加えています。屈曲部内面は、横ナデされ稜はありません。 Su33は、口径35cmの大型甕で、大きく開く口縁部を持っています。断面三角形の口縁端部は、上方に小さく突出しています。口頸部の調整は、まず横ナデし中位に2条の沈線を入れた後、この上方に左下りの斜行文をヘラで施しています。胴部内面は同心円圧痕、外面は細かい平行タタキ文。外面は漆黒色を呈し、大型甕にしては整形、調整とも丁寧です。Su34は、6号トレンチ、石室上埋土、墳丘などで出土した破片が接合しました。口径は26cmで、丸みのある肩部をしています。頸部はよく締り、強く湾曲して短かい口縁部を作っています。胴部外面は細かい平行タタキ目の後にカキ目を加え、内面上半は同心円圧痕をナデ消しています。胴部の一部には灰がかかっています。

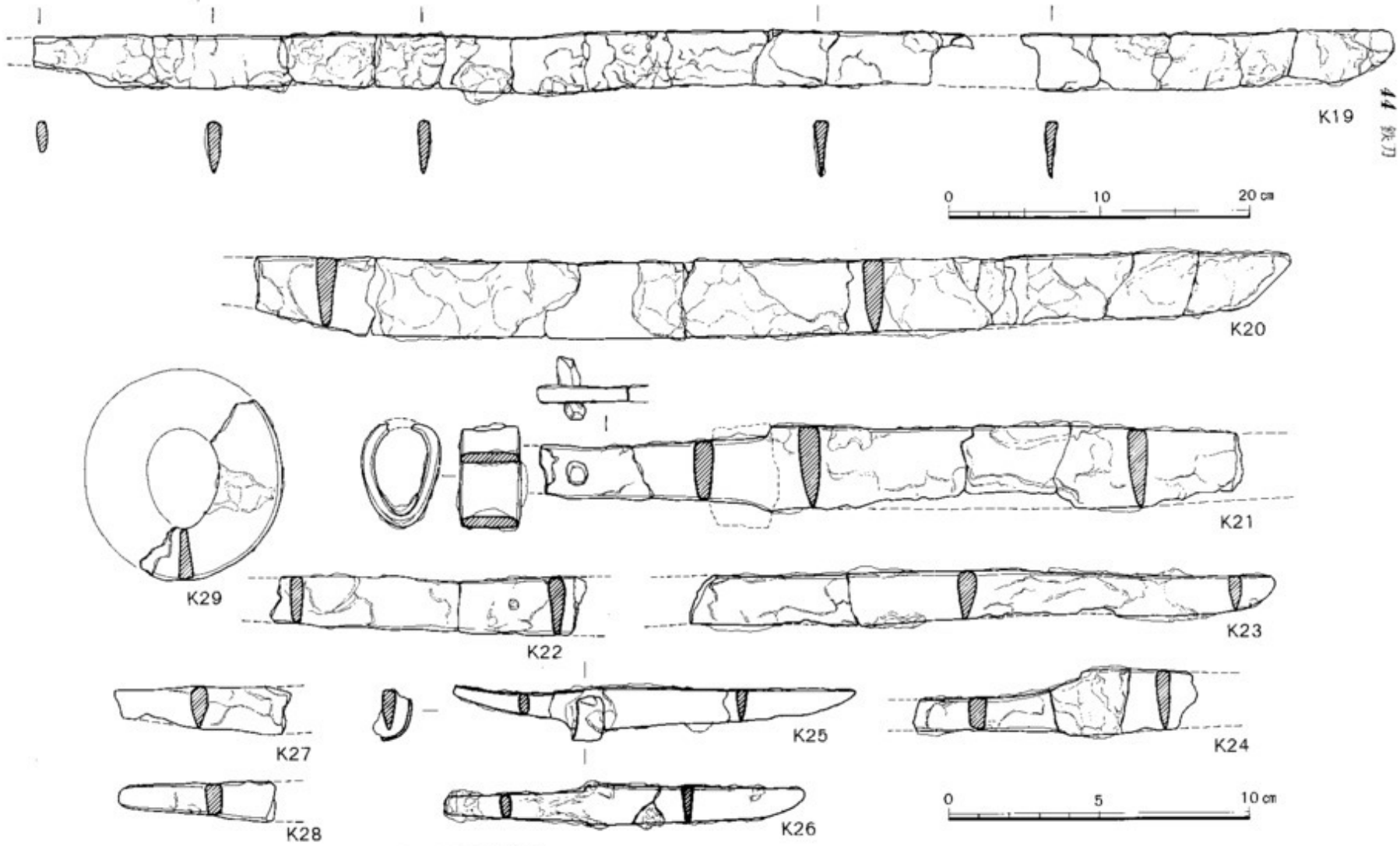
鉄 器 直刀4振・刀装具2個・刀子2本・鉄鏃15本以上・馬具等が出土しました。

直 刀 K19は、大刀と呼んでもよい長大なものです。玄室の左側壁から玄門にかけて、鋒を奥壁方向に、刃を玄室中央側に向けて置かれていました。茎尻と身の一部を欠失していますが、出土状況から計測して、茎の欠損部分から鋒までは約91cm、区幅3.4cmを測ります。全体に錆化が著しく、板状の剝離が進んでいます。平造りで、身の中ほどから区側には肉がつきますが、鋒側は肉が枯れてむしろへこみ気味の断面を呈します。K20、21は、K19と同じ方向をむいて重なる様に出土しました。K20は、茎尻を欠き現存長34.2cm、刃部30.9cm、区幅2.5cmで平造り、カマス鋒になっています。K21は、身の鋒側と茎尻を欠き、現存長23.2cm、区幅2.8cmを測ります。茎には、長さ22mmの鉄製目釘が通り、区部には鉄製の把縁が残っていました。K23は、石室左側壁にそって、石室のほぼ中央あたりに置かれていました。細身の小刀です。身部下半を欠き、現存長19.3cm、最大幅1.7cmを測ります。

86 2号墳の鉄器出土状況(直刀)



87 2号墳の鉄器出土状況(轡・直刀)

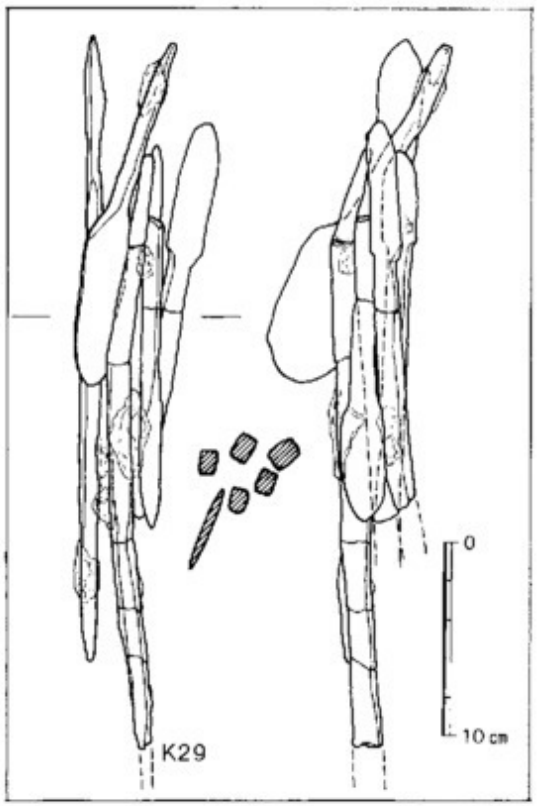


88 2号墳出土の鉄器(直刀・刀子)実測図 (縮尺1/2、1/4)

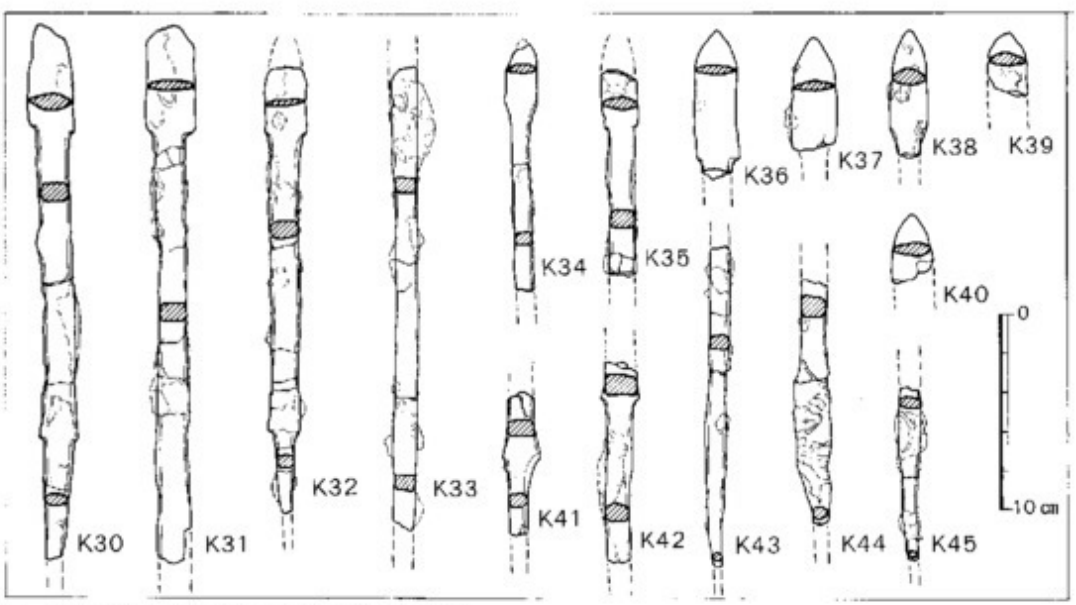
89 2号墳出土の鉄器(直刀・刀子、縮尺1/2、1/4)

刀 装 具 K21の直刀には、把縁の金具がついていました。幅19cmの鉄板を卵形にまげたもので、棟側を一部欠いています。内側には、把のものと思われる木質が付着していました。K29は、鐔の破片です。倒卵形で、透しはありません。推定で長径8cm、短形5.6cm、把の穴の長径3.3cm、短径2.4cmと考えられます。羨道から出土しました。

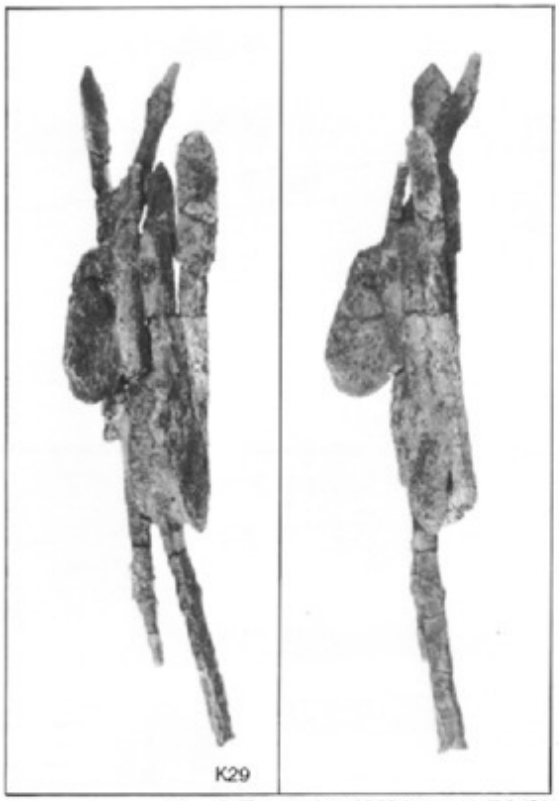
刀 子 K25・26は羨道から出土しました。K25は刃部9.5cm、茎3.8cm、区幅1.3cmを測り、茎はつよく反り上っています。区には、鉄製の鞘に金具の一部が錆着していました。K26は、刃部7.2cm、茎4.7cm、区幅1.3cmで、まっすぐな造りをしています。K22は、茎の破片と思われます。羨道から出土しました。目針穴が2孔穿たれています。K24は、区の前後の部分の破片です。K27・28は、石室内から出土した茎尻の破片です。



90 2号墳出土の鉄器(鏃)実測図(縮尺1/2)

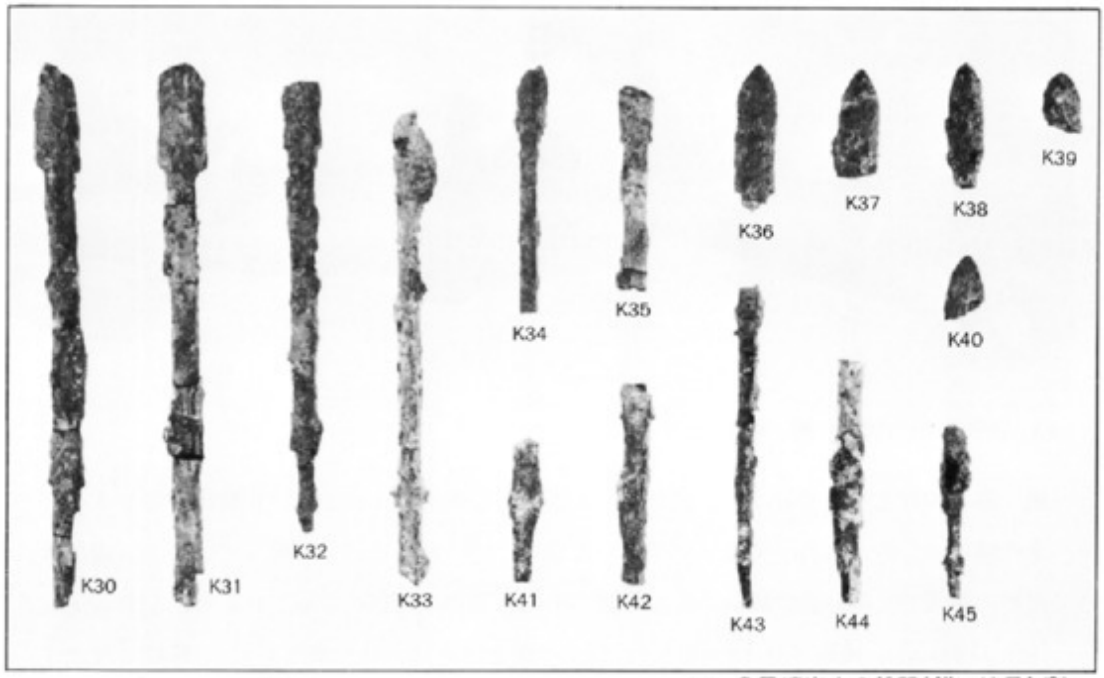


91 2号墳出土の鉄器(鏃)実測図(縮尺1/2)

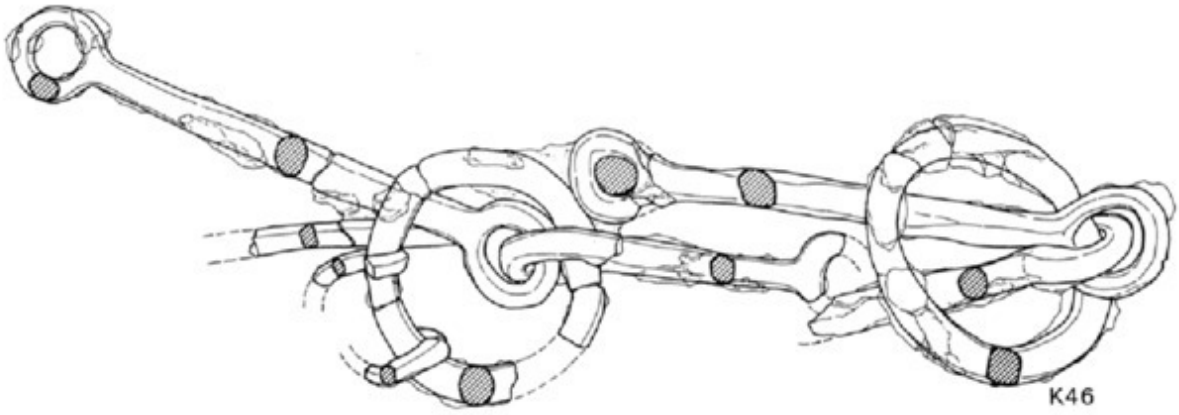


92 2号墳出土の鉄器(鏃、縮尺1/2)

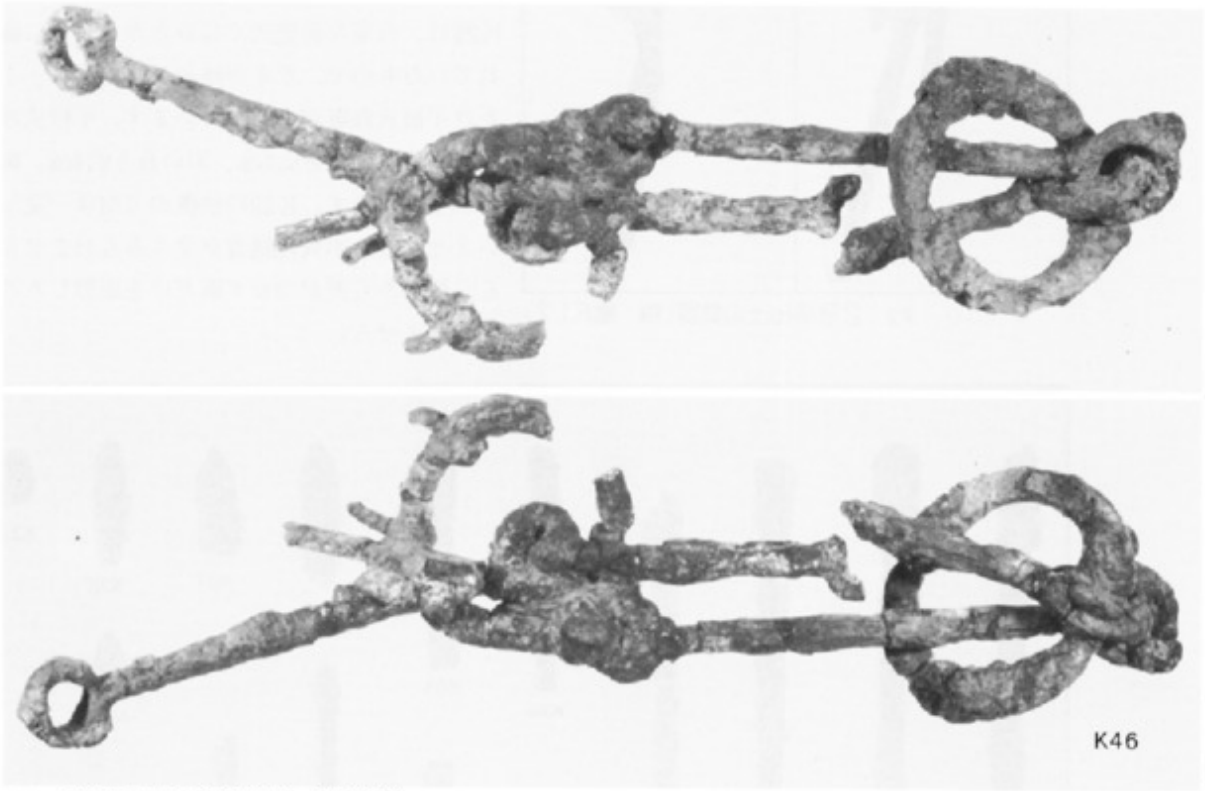
鉄 鏃 K33・34・43～45は羨道、それ以外は玄室から出土しました。K29の中の1本を除いて、全て長頸式鉄鏃で、両刃で薄いレンズ状の刃部をもちます。頸部からあきらかな段をなして茎を造ります。K30は現存長13.8cm、刃部2.7cm、K31は13.9cm、2.7cm、K36は刃部3.3cmを測ります。K34は、全体に小振りで、頸部から緩く外反する弧を描いて刃部を造り出します。K33・34・43・45など羨道出土の鉄鏃は、石室内出土のものに比べて慨して細めだといえます。K44には、箆の上からまかれた樹皮が残っていましたが、その他の鉄鏃には木質は全くみられません。K29は、石室左側壁近くにひとかたまりに置かれていたもので、6本が錆着しています。1本だけ平根式鉄鏃がまじっています。平根式鉄鏃は、完形品で長さ9.1cm、刃の長さ約4cm、幅約2cmを測ります。K29の鉄鏃の方向は一定していませんし、木質の錆着が全くみられませんから、初めから箆がつかず鏃だけを副葬したのかも知れません。



93 2号墳出土の鉄器(鏃、縮尺1/2)



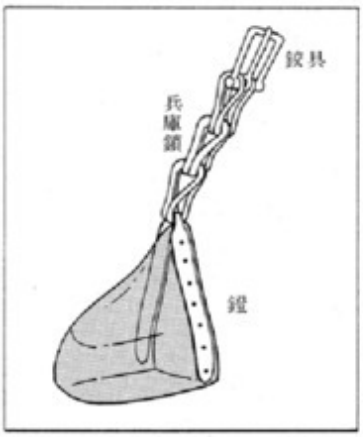
94 2号墳出土の鉄器(轡)実測図(縮尺1/2)

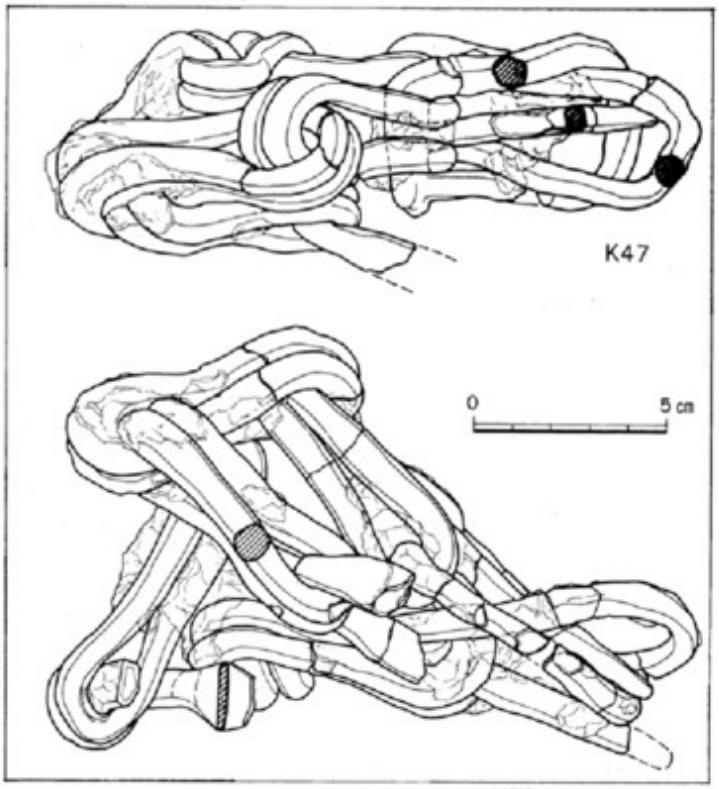


95 2号墳出土の鉄器(轡、縮尺1/2)

馬　具　轡が玄室左側壁から、鐙が羨道右側壁から出土しています。**K46**は、轡です。銜の啣金の輪の部分の一部と、鏡板・立聞の一部が欠けている他は、よく残っています。鏡板は、楕円形の素環で、細い鉄の環をふたつに折りまげた立聞がこれについています。左右の銜先の間(銜)は約16cm、鏡板の径は約16.5cm、引手の長さは約15.5cmを測ります。 **K47**は鐙です。左右の鐙が、ひとかたまりに出土しました。鞍からはずして、左右の鐙をまとめて副葬したのか

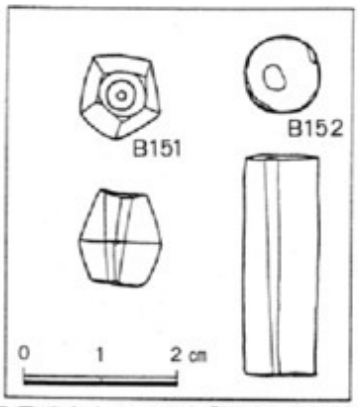
も知れません。鐙本体は、おそらく木心鉄板装壺鐙と思われますが、鉄板の吊指の部分が残っているだけです。鐙を鞍から吊下げる鐙靼は、三段の兵庫鎖に鋲具をつけたもので、約25cmの長さになると思われます。



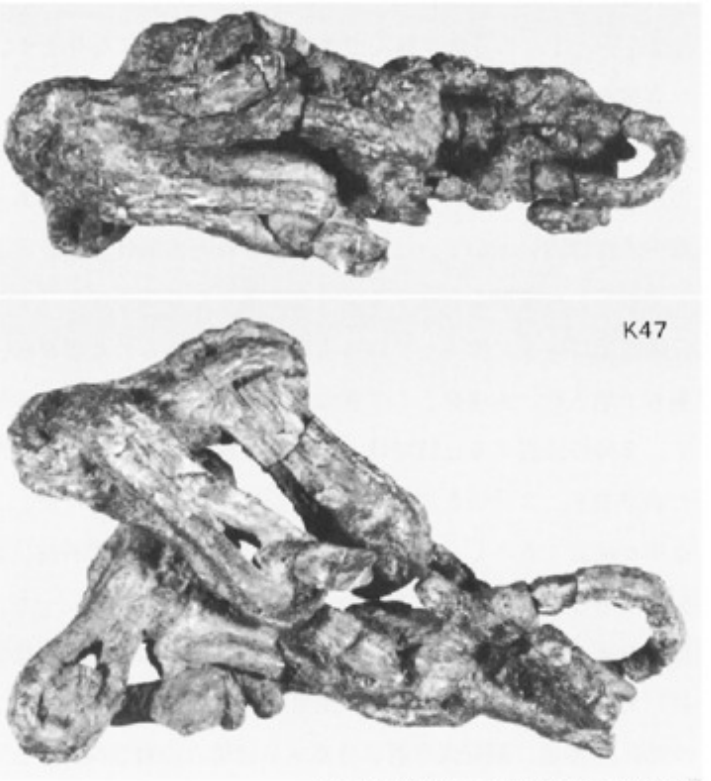


96 2号墳出土の鉄器(鐙)実測図(縮尺1/2)

玉　類　玄室敷石の間より切子玉1点、玄室埋土より管玉1点が出土しました。B151は水晶製で、断面は不整五角形を呈し穿孔は一方から行なわれています。B152は濃緑色の碧玉製で、丁寧な研磨が施されています。



98 2号墳出土の玉類実測図(縮尺1/1)



97 2号墳出土の鉄器(鐙、縮尺1/2)

0　1　2cm

第3章　おわりに

これまでに丸尾1、2号墳の石室や遺物などについて記してきましたが、丸尾古墳の性格―被葬者や席田遺跡群における歴史的位置、背景などについては触れる事ができませんでした。ここでは、2、3の補足をするとともに、問題点などを記してまとめとします。**丸尾1号墳**の石室は、腰石の配置や遺物の出土状況から、斜面側小口部を横口とし西側に開口する竪穴系横口式石室と考えました。奥壁に大きめの腰石が用いられ、また掘り方も奥壁側が狭くなっている事などは、先の推測を補強すると思われますが、腰石上部の石積みがすでに破壊されており、横口部の構造を直接知る手懸りは残されていません。竪穴系横口式石室についての柳沢一男氏の論考[註1]によると、丸尾1号墳石室は、5世紀第4四半世紀から、6世紀第2四半世紀の中頃での造営とされるⅢB期B2型石室に該当します。この分類に入る古墳の中では、福岡市東区飛山1号墳と席田遺跡群貝花尾1号墳に最も類似していると思われます。この二つの石室の周壁は、大きめの腰石が用いられているものの、横口部の腰石は奥壁よりも小さく、かつ横口部外側には側壁状の塊石が数個置かれるという共通点があります。丸尾1号墳石室に側壁状の塊石が存在したかは、確かめようがありませんが、石室内より出土した土師式土器と同じ特徴を持つ長頸壺が貝花尾1号墳でも出土しており、遺物の示す時期も、先の造営年代の幅に入ります。これらの事から席田遺跡群内では、ほぼ同時期の竪穴系横口式石室を持つ丸尾1号墳と貝花尾1号墳とが、1つの丘陵を挟んで造営されていた事になります。

丸尾2号墳は、墳丘の大部分が二次堆積土によって埋没していたものの、石室は早くから盗掘されたらしく、羨道部閉塞は取り除かれており遺物も散乱していました。出土遺物からは大まかに6世紀後半頃の造営と思われますが、やや時期差があり、数回の追葬も想定されます。席田遺跡群内において、これまで確認された古墳は、ほとんどが尾根先端や山頂に単独に位置しており、古墳群を形成するような密集した分布ではありません。しかし丸尾2号墳のように丘陵斜面に完全に埋没している古墳の存在も知られた事から、さらに多くの古墳が眠っている事も予想され、古墳群として各古墳相互の関連が追求できる段階になりつつあります。貝花尾1、2号の位置する丘陵では、国体競技場建設の造成工事で地すべりを誘発し、保存されていた新立表2、3号墳を1984年度にやむなく発掘しましたが、一丘陵に4基の古墳が存在している事が確認できました。これらの古墳は5世紀後半代前後に造営されていますが、丘陵ごとに発展段階として把握できるのか今後の課題の一つです。一方、古墳時代の住居跡は、大集落ではありませんが、丘陵裾部の中尾、赤穂ノ浦、久保園遺跡などで検出されています。席田遺跡群における古墳の被葬者やその歴史的背景の究明は、これらの集落の消長、あるいは生産基盤の究明、粕屋、福岡両平野に分布する古墳との対比検討などが不可欠でしょう。

註1　柳沢一男「竪穴系横口式石室再考」(森貞次郎博士　古稀記念『古文化論集』1982)

福岡市博多区
席田遺跡群（V）
丸尾古墳
福岡市埋蔵文化財調査報告書第114集
©1985年３月31日発行
編集
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目７－23
電話（福岡）７１１－４６６７
印刷　祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南4丁目15-17
電話（092）４１１－１６１１

席田遺跡群

丸尾古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第114集

1985

福岡市教育委員会